

これを伝えて幕末に至っている。

柳生にはなお長谷川流棒術が伝わっている。その来歴はつまびらかではないが、兵部卿法印靈照の署名で長谷川武英に与えた兵術書が残されており、棒術が民間武術としてこの地方で行なわれ、長谷川家がその中心をなしていたものであろうか。江戸時代の末期に長谷川金右衛門がよく棒を使ったといい、子孫数代にわたり、同氏の門は賑わったといわれる。このような武道は、奈良の武具・刀剣の生産とも関係深いものであろうが、それについては第二章に述べたとおりである。

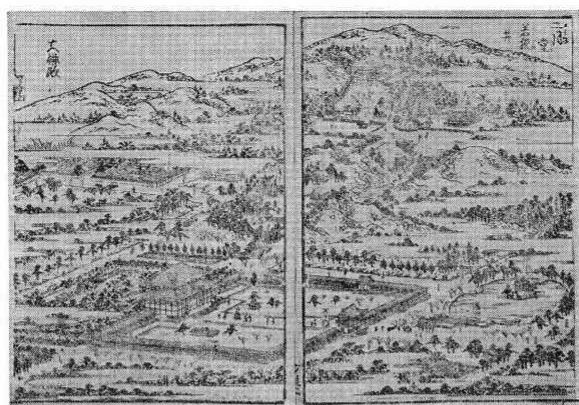
第二節 近世文化の諸相

寺社の盛衰

東大寺・手向山 元禄の時代に大仏が修理され大仏殿が再建されて、奈良が空前の賑わいをみせたことはすでに述べた。この大仏の復興事業を機として、東大寺ではさらに堂舎の建立されるものがあり、寺全体として整備が進んだ。

大仏鑄造工事の途中、大勧進職の公慶は、東大寺の本願である聖武天皇をまつる堂宇のないことを嘆き、勧進所の中に聖武天皇像をつくり安置する計画をたてた。そこで、元禄二年（一六九）に安井門跡道恕の家司であり仏師で

第四章 奈良の近世文化



大 仏 殿『大和名所図会』

表81 東大寺諸伽藍再興表

大勸進	公 慶	公 盛	公 俊	庸 訓
年代	貞享元～宝永2年	宝永2～享保9年	享保9～13年	享保13～元文2年
大 仏 殿	大脇 仏力 及土 鑄掛 胎内修理 飯厨子石座 (開眼供養) (木作始)	大仏後光	後光土台 二脇土首	脇土観音・後光
	大仏殿	上棟(堂供養)中門 東案門 西案門 東回廊 西回廊 中門二天	回廊 軒廊	土手 東西高欄 脇土観音及後光 回廊 軒廊
神	八幡宮 本社及廊 若宮及拝 殿 楼門 神楽所	八幡宮屋根替楼門 下地組替末社葺替 大鳥居 二鳥居		宝蔵修理
社	神社 三社宮● 竜池社● 天狗社● 弁天社●			
諸 堂	念仏堂 護摩堂 俊 乘堂 大湯屋 新造 屋●	公慶堂 新造屋	新造屋 葺替	
諸 院	東照宮 日光権現宮 東照宮拜殿 宸殿 次の間 車寄 台所	経蔵移建 妙厳院 大喜院 台所		
勸 化 所	阿弥陀堂 聖武天皇 殿及拝殿 宝蔵 鎮 守社 鐘楼堂 接待 所 客殿 台所			
そ の 他				吉城川石橋

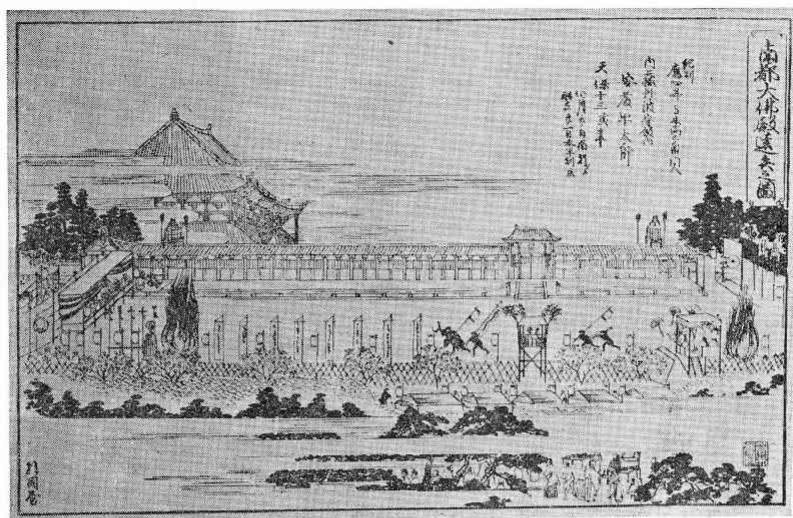
●は新造分、ほかは再建・修理分、「興隆略記」(勸修寺蔵)

あつた帥法印堯海に依頼して、大仏殿の再興成就を念じて聖武天皇像を作成させた。また、勸修寺済深法親王に願つて、勸修寺が京都御所から移築した仏殿を再び仏化院の奥に移して、ここに聖武天皇像を安置したのである。なおこの像の宝冠は東山天皇から下賜されたものであつた。この年二月には、本願天皇入影の法要を営み、済深法親王を開眼の導師として供養を行なつた。

この堂は、いま僧形八幡殿として明治以来使用し、聖武天皇像は東大寺本坊になつてゐる東南院の東照宮跡に安置し、天皇殿としてまつてある。

天皇殿のほかにも、大仏殿再建工事の進行中に東照宮や俊乗堂がつくられたが、さらに大仏殿の落慶大法要のうち、第三期の工事として大仏殿周辺の付帯事業がすすめられた。まず宝永六年（一七九）三月には中門の作事始めがあり、老中秋元但馬守喬知の来山を機に、中門の工事方の推進協力を依頼した。正徳元年（一七二）には、大坂勸化所を中心として大仏の光背および化仏の勧進がはじめられ、この年の九月には中門の立柱があり、正徳四年（一七三）の四月に中門は落慶した。つづいて、大仏殿回廊の鉦始めがあつたが、その工事中に公盛が病死して公俊が大勧進職をひきついだ。公俊はまず大仏殿内の脇土の如意輪観音と虚空蔵の造像をはじめ、つづいて大仏殿回廊工事に着手した。しかし西軒廊だけができた段階で公俊が病死したため、金珠院庸訓にこの事業がひきつがれた。

庸訓は大勧進職をついでから、回廊の建設に専念したが、全回廊の建設が不可能であつたため、中門から大仏殿にいたる間だけの回廊にして、北側は石組の土手を築いて補うことにした。享保十五年（一七三〇）には大仏脇土の二菩薩もできあがり、元文二年（一七五）には大仏殿東軒廊も完成した。こうして同年四月の公慶の三三回忌に当たつて全計画の完了をみたのである。そのときの「興隆略記」には「公慶生涯興隆之苦勞仕候ニ付、三十三回忌追善法事之儀、准_レ俊乗之忌日「法華八講執行仕度之候」と公慶の遺業をたたえている。東大寺の江戸時代における伽藍再



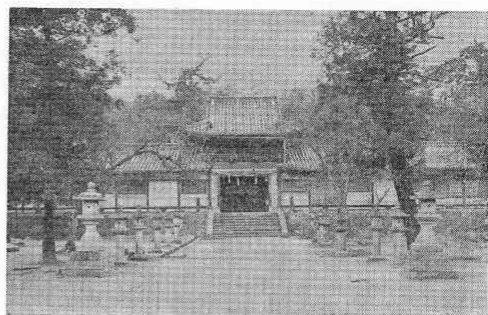
大仏殿遠矢之図 天保13年（筒井正夫氏藏）

興はここに一段落を告げ、ほぼ現在みられるような寺観ができあがった。「興隆略記」にみられる東大寺造営の記録によって作成したのが表81である。

なお、ここで大仏殿回廊ができあがったことに関連して、同西側回廊で遠矢がおこなわれたことを付記しておこう。世間では京都三十三間堂の通し矢が有名であるが、ここでもたびたびこれにいどむ者があり、柱などにいまもその痕跡を止めている。

東大寺の寺内では、国分門・新禅院が寛永十九年（二四三）に炎上し、戒壇院は松永の兵火によって廃絶状態になっていたが、戒壇院の方は享保十八年（一七三三）に武蔵国霊雲寺の慧光によって中興している。

東大寺復興に関連して、公慶はじめから東大寺八幡宮の造営を志していた。それはこの八幡宮の天平創建にかかわる故事によるものであることは当然のことであろう。当八幡宮は、もと大仏殿前の鏡池の東側の高台にあったが、寛永十九年（二四三）十一月の大火によって全焼した。炎上以後その再建について、たびたび幕府に上申を重ねたが、実を結ぶまで



宮幡八山向手

にはいたらず、そのために一時的に黒木造りの仮殿を構えて雨露をしのぐ状態であった。天和二年（一六六二）になって、公慶は機を得て江戸に下り寺社奉行に訴えたが、中途これを一時断念して大仏殿の再興に専念することとなった。

ところが大仏の修理がすすむにつれて、再び八幡宮造営のことがとりあげられることになり、元禄四年（一六八七）正月に造営に着手、この年八月にその工事が終わり正遷宮がおこなわれた。その位置はいまの神社の地であって、ここに本社・若宮・末社・両拝殿・御廊・神楽所・楼門が造営された。「興隆略記」に「鎮守造営事者、大仏殿再興願之発端也、依而如形今度令造営繕、奉祈大殿成就之擁護意願也」とあるように、大仏修造成就の祈願として、天皇殿の建立とともに、いまにみるような姿を整えたのである。現在楼門の前にある一字の校倉は、三月堂経庫とともに正徳年間（一七一一）に油倉の宝蔵を移建したものと伝えられている。

正倉院は、松永の兵火に危うく難を免れることができた。永禄十年（一五七五）五月、東大寺戒壇院の焼失について十月には大仏殿も炎上したが、講堂と三面僧坊の大建築群が中世以来再建されておらず、大仏殿と正倉院の間にかのりの空き地があったことと、当夜は西風であったために、正倉院の宝庫は助かったのである。そののち、織田信長が蘭奢待を切ることなどがあったが、江戸時代になって、三回にわたる修理と一度の盗難があった。

慶長八年（一六〇三）、徳川家康が將軍職についてまもなく正倉院の修理をおこなっている。この修理がどの程度のものかよくわからないが、このとき家康の名で宝物容器として長持三〇箱を寄付しており、家康に対しては人參・

竜骨・白竜骨・甘草の四種の薬物の蔵出しが許されたらしく、家康はこれを医師吉田宗恂に贈っている。ついで、同十五年（二六〇）七月二十一日の大風の夜に盗難事件がおこった。この夜大仏の飯屋の倒れたのを取り片付けるためにその指図をしていた東大寺側の三名が、北倉の床板を切って宝物を盗んだのであった。この件は、その後約一年半もわからず、不思議な売り物があることから調査してわかったという。そこでこの一件は代官大久保長安の手に移り、さらに京都所司代板倉勝重のもとで審査され、犯人は猿沢池畔に飯につくられた牢に入れられてさらされ、一人は牢死、二人は極刑に処された。正倉院宝物をいかに重くみたらがわかる。

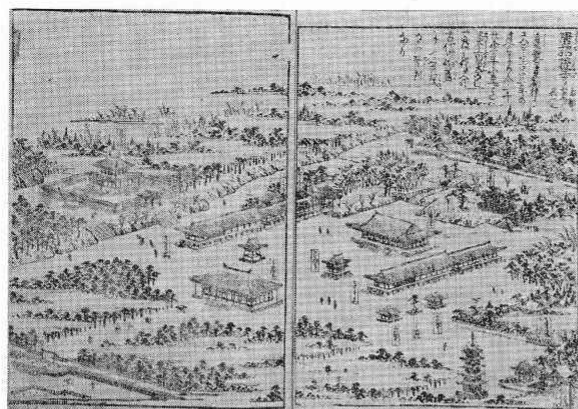
近世第二次の修理は元禄六年（二六六）におこなわれた。宝物修理が判然とわかるのはこのとき以後であって、鳥毛立女屏風などが修理されることになり、それらは当分倉外に止めおかれた。寛政四年（二五二）には幕府の儒官柴野栗山が画家住吉広行とともに東大寺の倉に保管中のこの屏風を見ている。ついで天保四年（二六三）から七年にかけて屋根をふきかえるなどの大修理があり、奈良奉行梶野良材がその奉行兼検校をつとめた。このときを期して正倉院所蔵の古文書整理が実施されたが、その発端は、東大寺の寺務を支配した勸修寺宮濟範法親王が光格天皇の意向を梶野良材に伝えたためであったという。このとき、奈良奉行に属する穂井田忠友が古文書の一部を整理して四五巻としたのであって、これが大宝二年（七三二）の戸籍を含む『正倉院古文書正集』と呼んでいるものである。

唐招提寺の復興

唐招提寺は、周知のように鑑真のために新田部親王の旧地を賜わって創建された寺で、ここに戒壇が設けられた。そののち同寺はいったん衰えたが、鎌倉時代の中ノ川実範が律学を興し、解脫上人貞慶が釈迦念仏会をはじめ、大悲菩薩覚盛が寺規を定め、十四世紀の初頭には寺観を一新するまでに復興した。ところが永正三年（一五〇）五月の大地震に多くの堂舎が倒壊し、そのうえ戦国の戦乱のもので、寺禄は武門に横領され寺運は衰退の道をたどったのである。しかも慶長元年（一五九）閏七月の近畿大地震のために再びその災を

被り、残る堂塔すなわち戒壇堂・僧房・阿弥陀堂・鐘樓・樓門などが倒壊し、金堂・講堂・東塔もまた破損してしまつた。

唐招提寺としては、さっそく「請_レ特蒙_二貴賤道俗恩恤_一加_二当_一寺仏閣塔庫院僧房回廊築地修造_上状」という見出しの勅進帳をつくつて、寺の再興を願つたが思うにまかせず、徳川家康が五条村で三〇〇石を寄せ、家光もまた助成を志したが、いずれも焼石に水の状態で根本的な修造はのぞむことができなかった。

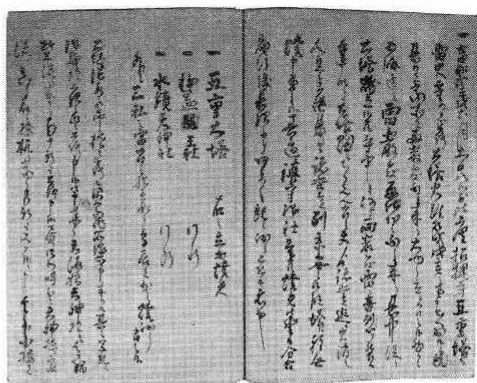


唐招提寺『大和名所図会』

ところが、元禄のころになってその機が熟してきた。すなわち唐招

提寺側は藏松院英範を中心として寺の復興を企図し、江戸の隆光にその援助を求めたのである。隆光は幼時当寺に入って朝意のもとで薙髪したという深い因縁があったからであらう。しかしそれだけではなく、このころ幕府では、將軍綱吉とその生母桂昌院をとりまいて護国寺の亮賢と隆光がその側近にあり、仏教信仰と寺院復興の氣運が盛りあがっていたときであったからでもある。事実、東大寺の公慶や法隆寺中院の覚勝らも、幕府上層部のこの雰囲気をも機として必死の陳情をなしつつあったのであって、この氣運は南都寺院の疲弊を訴えるのはまたとない好機であったといえる。したがって奈良奉行妻木彦右衛門も伽藍復興にはかなり積極的にとりくむ姿勢を示していた。

ここに東大寺はさきに述べたように復興し、法隆寺も元禄の末ごろには修理を果たすことができた。唐招提寺もまたその計画をなしとげ



享和2年 唐招提寺塔炎上の記事「井上町中年代記」

講堂の修理も完成し、御霊殿も再建された。

このように唐招提寺の再興には、十万人講の浄財が土台になったとはいえるものの、幕府の協力が大きな力となっていた。ことに戒壇堂の建立は桂昌院の熱意に負うところが多く、舍利塔や荘嚴具も近代まれな優美なものとなり、葵紋が柱の金具などにまで刻まれた。

しかし、せっかく寺観を整えた唐招提寺も、約一〇〇年のちの享和二年（一八〇二）に雷火にあって五重塔を焼失し、鎮守社・婆門・回廊も炎上するという災をうけた。また御霊殿も大破し、諸堂の仏体や一切経も破損するようになったため、文政八年（一八二五）には二〇か国勸進の許可を得たが、元禄のときのようにはいかなかった。そのうえ嘉

たのである。元禄五年（一六九八）、英範は將軍から白銀五〇〇枚を寄進されたのを機縁として、翌年から五か年間に勸進の期間とした。御祈禱十万人講というのは、「懸銭五年之間、毎月人別六錢宛入、此講中輩者、千手堂現名帳記留、長日修三秘密護摩供一永々無退転、祈各々之願望一者也」というもので、千手観音像を画いた札を配って勸進した。勸進は元禄六年（一六九九）十月から始められ、一乗院真敬法親王を筆始めとし、その勸財は南都を中心に江戸・京都・大坂など諸国にまでおよんだ。この勸進帳のなかには、桂昌院をはじめ柳沢出羽守保明ら幕閣の有司も名を列ねている。そのほかに祈禱料としてまた戒壇堂造営のために、桂昌院から黄金七〇〇枚の寄進などがあり、宝物・屏風・幢などの荘嚴具の施入もあって、元禄九年（一六九四）には戒壇堂の落慶大法要が営まれた。また同時に金堂および

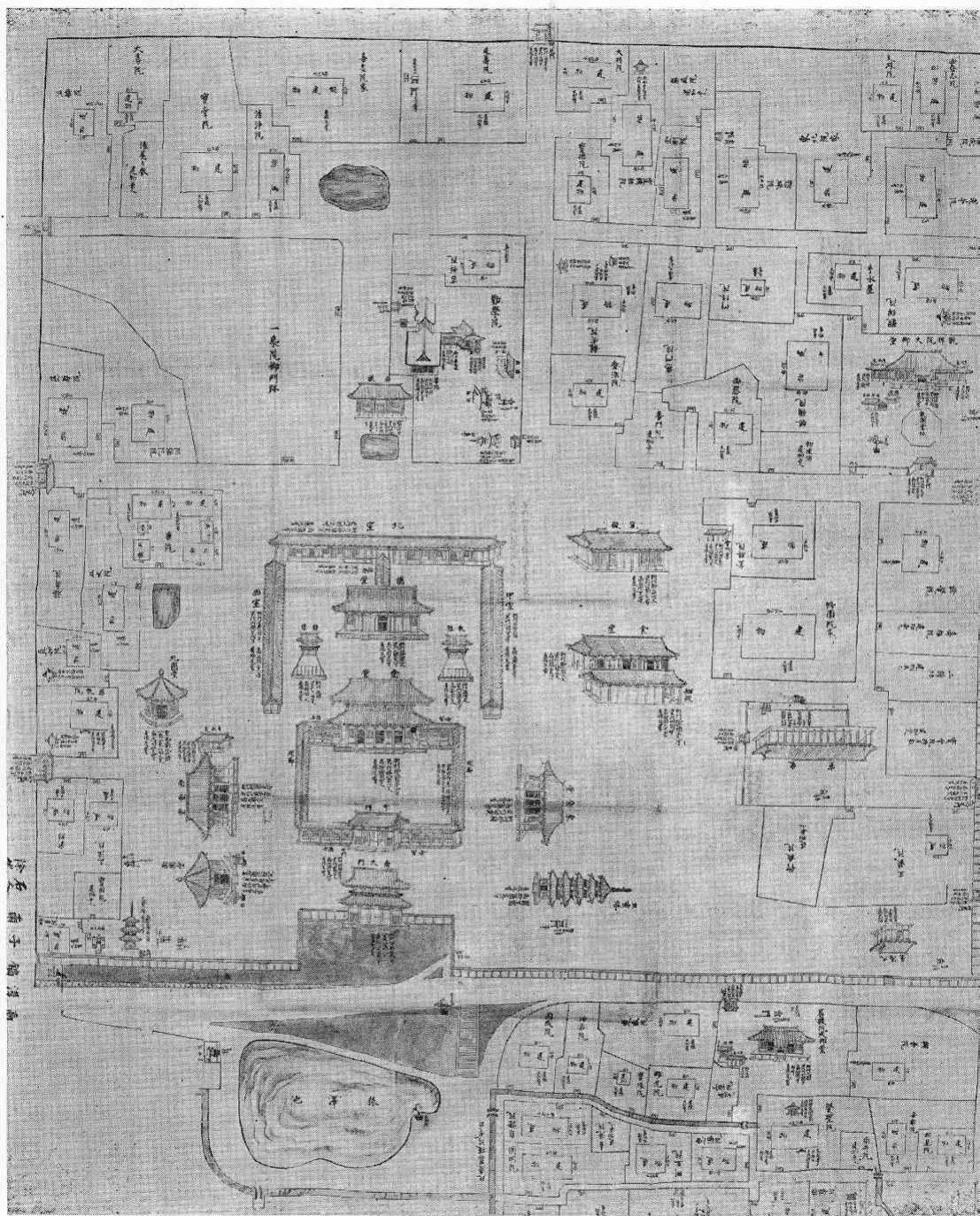
永元年（八四〇）には、さらに業火によって戒壇院も炎上し、戒壇院は石壇と表門と築地塀を残すだけとなったのである。

興福寺の炎上と修復

中世以来大和一国を支配した興福寺は、幕藩制の圧力下にあったとはいえ、他の諸寺とはなご格段のちがいのある朱印地を許され、奈良の中央部に広大な地域を占め、両門跡を擁し多数の子院をひきいて隠然として大きな発言力を持ち、奈良文化の中樞に位していた。

近世初期の興福寺の状況を知るために、永禄八年（一五七五）奈良に来たキリシタン宣教師アルメイダの記述を参考としよう。アルメイダはまず「外廊の大きさはベラインの僧院に等しく、甚だ堅固にして石灰を以て塗りたる土塀にて囲まれたり」とその外観と土塀に感心し、土塀の上に二階のある南大門を見、「門の両側に驚くべく長身の門番あり、手に棒を持ち各象二頭の大きさを有せるが、釣合好き像なり」と仁王像を眺めて金堂に進んだ。「此等諸門・庭及び回廊の前面に寺院の正門あり、美麗なる石段と甚だ大なる玄関を備へ、寺院の周囲及び床には悉く方形の石を敷きたり、寺院の柱は悉く杉にして太く高きこと驚くべく、此の如き樹木ありと思はれざる程なり、柱は総数七十本あり、甚だ長大に且光沢ありて觀者に快感を与ふ、此柱は立上げたる上錢百万即ち五千クルサドに当る」と寺院の経費帳記載に依りて明なり、堂内に高さ七ブラサの坐像三体あり、中央は釈迦の像にして左右は其子の像なり」。これが金堂の描写で、さらに軒の斗拱にも感嘆している。ついで食堂の美しさ、両棟計一八〇の寢室をもつ僧房の大きさ、百万巻あるかと思われる経蔵の經典、また大湯屋・竈殿のことまでも詳しく述べている。そして終わりに猿沢池を見て、「此処に魚類多数あれども、何人も之に手を付くる者なし、之に對して大なる罰あるが故なり」と結んでいる（『耶穌會士日本通信』）。外人の見聞で誇張もあろうが、当時の興福寺の盛観はしのばれよう。

ところが享保二年（一七二七）正月四日夜、講堂内陣の灯明から出火し、堂舎の多くをたちまち灰燼に帰してしまっ



興福寺絵図 焼失前宝永5年（興福寺蔵・写真＝奈良国立文化財研究所許可済）



興福寺南円堂

た。「東大寺年中行事記」によると、「同日（二月四日）夜戌刻興福寺講堂より出火、金堂・中門・南大門・鐘樓・鼓楼・西金堂・南円堂・三方之回廊・三方之室迄不_レ殘焼失、塔・東金堂・食堂・北円堂・一乗院門跡其他諸院之者無_レ別儀者、（中略）近代無_レ之大火、言語絶申事不_レ過_レ之也」とあつて、焼失した堂舎と難を免れた堂塔の次第が大体明らかである。「興福寺伽藍炎上之記」をみると、金堂と講堂の本尊が焼けたこと、西金堂や南円堂の諸仏は取り出して猿沢池や唐院前の池に沈め翌日引き上げたこと、炎上を免れた北円堂・東金堂・食堂などの諸仏も一たん外に持ち出したことなど、そのうろたえた様子がうかがわれる。この大火によって、興福寺はその中枢部に壊滅

的な打撃を被ったのである。興福寺では、災後ただちに仙洞御所・京都所司代・幕府の寺社奉行などにこの旨を報告し、正月六日には勅使が検証のために来寧した。また南円堂本尊は仮に五重塔の東方に遷して安置した。

寺側は、享保九年（一七二四）になって、一乗院と大乘院の両門跡とともに江戸に下向して興福寺造立勅化の願書を幕府に提出し、やがてその許可を得て、翌十年から再興の勅化にとりかかった。その「勅化疏」の前書はつぎのようである。

南都興福寺ハ古より勅願所として国家安全之御祈り他に異なり、去ル西年炎上せしめ今度造営に就て、公儀よりも御寄附之品有之なり、志之輩ハ其分限に応じ物之多少によらず寄進すべき旨被仰出畢、猥にすゝめ請へからざる者也

享保十乙巳年九月

黒田豊前守印

（下略）

このあとに疏の文を記し、終わりに上座法眼和尚位清乗・寺主法橋上人位秀衛の名を連ねたものである。このとき、幕府からは三〇〇〇兩の寄付をうけている。

そして焼け残った竈殿に大安寺の古仏阿弥陀如来像を安置して、ここを勧化所として活動がはじめられた。なお大坂では生玉の医王院に西金堂の如意輪観音を遷して勧化所とし、京都では六角堂池之坊四王院をこれにあてた。興福寺勧化所では、多くの淨財を得るために華原磬などの宝物を展観公開するなど、努力を重ねている。

その結果、享保十四年（一七三九）九月にはようやく伽藍木作始めの儀が行なわれ（興福寺伽藍再建事始地曳并法会之記天理図書館蔵）、工事は南円堂から着手することになった。それは、南円堂が観音靈場の札所であり、庶民の信仰に支えられた堂であったからであろう。金堂の再建があとまわしとなったところに、この時代の姿をよみとることができる。やがて寛保元年（一七六〇）には南円堂の立柱を終えたが、工事は案外進捗せず、焼亡後七〇年を経た寛政元年（一七九九）正月になってようやく落成したのである。元禄期における東大寺や唐招提寺の場合のようにはいかなかったのは、南都寺院に対する有力な後援者隆光がすでに亡く、幕府の政策自体も仏寺の復興には積極的ではなくなっていたからであるが、何としても江戸時代後半期に入って世情も行きづまりをみせてきていたことと、奈良町の停滞期に当たっていたことなどが大きく響いていたといわねばならない。

中金堂の再建はさらに遅れた。幕府の援助もなく一般の寄進も少なかったが、界の豪商京屋文左衛門の手で、仮堂として文政二年（一八一〇）九月になっていまみるような堂宇ができた。このようにして興福寺の十分な復興はついに江戸時代には果たすことができなかったのである。

西大寺・元興寺・大安寺

元禄の時代を中心に、奈良では東大寺・唐招提寺の復興がみられ、大和では法隆寺や長谷寺などもその氣運のもとにあった。戦災で衰退していた超昇寺も隆光によって元禄年間に寺地を少し南

に移して僅かに復興した。しかし同寺はその後超昇寺三村の村民によって維持されたのである。前節でみたように近世初期にある程度再興した薬師寺と、前記の東大寺・興福寺を除き、南都七大寺といわれたほかの諸寺はどのような状態であったであろうか。いますこしかつての寺社王国の行方を追ってみよう。堂塔のたたずまいだけでその復興や衰退を論ずるのは形式的にすぎるかもしれないが、やはり寺運の盛衰をたずねるとすれば、自然それが一つの目安となると思うので、以下これを中心を考えることとする。

七大寺の一として寺観を整えていた西大寺は、中世末期には所在の土豪の侵略によって衰微しつつあったが、元龜二年（一三〇一）の兵火によってさらに多くの建物を失い、そのうえ豊臣秀長に寺領を奪われたために、一時は廃寺に近いものとなった。そののち徳川氏によって地元の西大寺村に寺領三〇〇石が寄せられてようやく面目を保持したが、すぐには復興もできなかったようである。すなわち護摩堂は寛永ごろ（一六四四）の復興といわれ、四王堂は延宝二年（一六二四）の建立であった。やがて元禄のころから再興計画が立てられ、寛保二年（一七四二）には金剛院伽藍再興のための勧進許可があり、その翌年には西大寺修復のために、山陽道八か国に庖瘡輕滅の加持札を頒つことが認められている。また宝暦四年（一七五四）四月から江戸回向院で蒙古退散の伝説をもつ愛染明王の開帳がおこなわれているのも、この復興資金を得るためではなかったかと思われる。また寺伝の豊心丹を売ることその助けとなったかもしれない。とにかくこの宝暦年間になって、かつて興正菩薩叡尊が建立した光明真言堂の跡に現存の本堂が再建され、四王堂のあとに観音堂や摂政近衛内前の寄付による愛染堂などが建てられたのであった。

西大寺は近世においてこのように衰退の様ではあったが、しかしさすがに孝謙天皇の創建や叡尊による再興の歴史を誇る大寺だけに、幾多の文化財をいまに伝えてきた。そういう伝統の一つに光明真言大会があった。叡尊によって始められ、土砂加持の行事として知られているもので、寛文八年（一七六八）の「西大寺法会年中行事次第」には、

八月の行事として

十八日 光明真言大会発願

毎年自八月十八日^二至^三廿五日^一、七日七夜之間十二時溫座不斷供養法、并諸国末寺衆僧出仕、十二時不斷陀羅尼唱講、持番役者正供養法師六口、権供養法師六口、願文師過去帳前讀後讀知事法廿五日真言結願

とあつて、近世を通じて敝修されていたことがわかる。また同じく叡尊にはじまると伝えられる大茶盛もつづけら

れ、はじめは鎮守八幡社頭であつたものが、この時代中期ごろからは方丈で行なわれるようになったという(『奈良市史』^一參照)。

参照

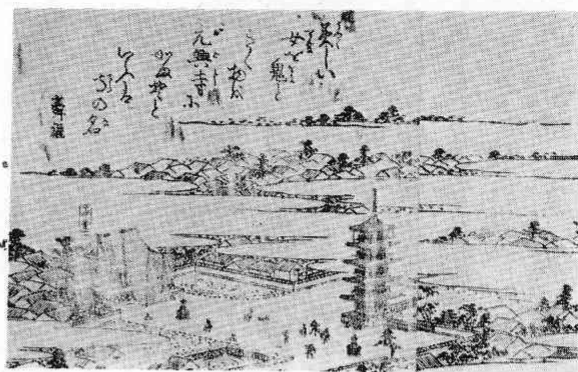
なお西大寺には「矢の根五郎」の絵馬がある。「矢の根五郎」は歌舞伎十八番のひとつである。曾我五郎時致が大矢のやじりを砥石にかけながら吉例の独白を述べる劇で、二代目市川團十郎が享保十四年(二五五)に初めて演じて連日客止めの盛況であつたという。これは、愛染明王の江戸出開帳のとき、江戸境町中村座で矢の根五郎を愛染明王の分身に仕立てて演じ

られたため、この関係者が報賽のために当時の芝居看板描きの名手鳥居清信に描かせたもので、清信の作としても重要なものである。

奈良町の中央にその寺地を占める元興寺は、すでに平安時代末期^(十一世紀)ごろから興福寺の勢力下に入り、禪定院も大乘院に占められ、その門前郷も大乘院下に入り、僧房の一部が極楽坊として民衆の支持をうけつつ独立化するなど、衰退の道をたどっていた。そのうえ宝徳三年(二五二)の火災によって金堂はじめその中



矢の根五郎絵馬 鳥居清信画(西大寺蔵)



元興寺『大和名所図会』

極部を失い、ようやく再興された金堂も台風のために倒れて、寺地には町屋が進出してきた。そのために大寺元興寺は完全に解体することになった。その結果近世初期には、五重塔と観音堂が法華寺村と肘塚村に寺領五〇石を与えられ、元興寺の称を伝えて東大寺下で命脈を保ち、文化・文政のころ（十九世紀）勸進沙門俊弁の出開帳や勸進相撲・富くじなどによる修復の努力も実らなかった。極楽坊は寺領一〇〇石を前記両村と法蓮村とで与えられ極楽院と称して西大寺下に入り、無禄の小塔院も西大寺下でわずかに存続してきた。しかし安政六年（一八五九）二月の火災によって五重の大塔さえも失い、ただ極楽院が奈良時代以来の僧房の一部を保ち小子房を建て、智光曼荼羅の信仰によって中世以来の民衆の寺院として、大寺の寺運を支えていたのであった。

大安寺の衰退はさらにいたましいものであった。平安時代には数度の火災にあいながらも再興されたが、そのちは一途に衰運をたどっている。僧房を失い西大寺末寺となっていたが、さらに文安六年（宝徳元年 一四四九）には地震でほとんどの堂舎が傷つき、延享二年（一七五五）には金堂もまた崩壊した。『資材帳』副状によると「此古寺零落後、金堂一字不思議残也、天正頃在之、至延享乙丑凡及三百七十余歳也、惜哉、是亦崩倒退転、愚師常語昔有様相伝余也、今纔礎跡耳也」とあり『和州旧跡幽考』にも、「わづか一むかしにやなりけん、阿誰といふ盲人あり、霊跡の絶なんをなげき、観音の像一軀のこらせ給ふを修補し、わづかに二間四面の堂を建立して、大安寺のしるしとなせり」と記されていて、諸

仏像はこの堂に重ね置かれたのであった。具原益軒も『和州巡覧記』で「今は寺絶て小庵に其名残れり、八幡の宮有、是大安寺の鎮守也」と述べている。その荒廢のさまがしのばれる。現在、奈良時代末期の作と考えられる仏像九体を蔵しているのは、さすがにその伝統を示すものである。

その他の寺院

つぎにまず幕府から朱印地を与えられた寺院で、これまでふれなかったものにつき二、三述べておこう。新薬師寺はいわゆる十三か寺の一つとして、寺領も法華寺・肘塚・法蓮の三か村で一〇〇石を与えられていた。元禄十一年（一六九六）に桂昌院の力によって本尊の修理が行なわれたが、このとき貴重な古写経が像内に納められていることが後に発見されている。つぎに東大寺戒壇院末となっていた真言院も上記三村で一〇〇石を領し、寛永年間に焼失後、慶安二年（一六四九）に再興した。また同じく寺領一〇〇石の諸寺には、このほかに海竜王寺・秋篠寺・靈山寺があるが、それぞれ地元の村で所領を与えられ、過去の盛時の面影を伝えつつ寺運を保ってきた。そのほか、真言律宗系の福智院・不空院、天台系の紀寺の璣城寺・正覚寺、浄土宗の崇徳寺・安養寺・称名寺などは、それぞれの因縁によって五〇石以下の小祿の寺領をやはり前記三村の内でも認められ、法相系の喜光寺は地元菅原村で寺領を得ている。

江戸時代における仏教の新宗派としては、承応三年（一六五二）に隠元によって伝えられた禪宗の一派黄檗宗がある。種々曲折ののち幕府の了解のもとに宇治に黄檗山万福寺を開いた。寛文十三年（一七二一）に後水尾法皇から隠元に御下問があり、その応答が法皇の旨になかったので以後法皇は隠元を尊信されたが、この間の事情は、法皇の皇子で一乗院門主であった真敬法親王が記録されている。隠元に招かれて渡来した高泉性激は、隠元の没後、万福寺の第五代となるが、この僧に対しても後水尾法皇並びに真敬法親王は深く帰依され、延宝三年（一六五五）には一乗院宮に高泉からの嗣法があった。法皇はこれを喜びつぎの書を与えられている。

先頃於黄檗山從高泉和尚嗣法之段承及候、珍重不可過之思給候、弥無油断修練肝要候也

延宝三年九月三日（花押）

一乘院宮

（「中村雅真氏
旧蔵文書」）

黄檗宗と奈良とはここに一つのつながりを持ったのである。法蓮の同宗瑞景寺は延宝七年（一六九）に創立し、一乘院宮から寺号を賜わったと伝えている。

禅宗系の寺院はさすがに奈良には少ない。臨済宗では、一絲に連なる円照寺と沢庵にかかる芳徳禅寺と芳林庵のほかには安明寺と竜象寺があるくらいであり、曹洞宗には郡山藩家臣関係の三松寺があり、黄檗宗では前記のほか二名村に王竜寺と円満寺があるにすぎない。

寺領を与えられず檀家制度下にもっぱら檀徒によって支えられていた諸寺院の分布をみると、さきに民衆の信仰の項で述べたように、奈良町では大部分はいわゆる鎌倉新仏教系、ことに浄土教に属するものであり、山間部では真言など旧仏教系が圧倒的に多く、平坦部では両者がまざりあっていた。

このうちで、新宗派の南都進出は、興福寺や東大寺の勢力の前に他の地方よりはその困難も多少おくれもしたと考えられるが、その時期はやはり大体において近世初期であったと思われる。事実各寺は、その創建、あるいは旧寺を改めた時代、または改宗した時期などに関しては、それぞれの由緒書や寺伝をもっているが、多くはその時代を十六世紀中ごろの天正期から寛永期にわたる約一世紀の間としているようである。このことは、靈巖院・念仏寺・金駄寺・興善寺・崇徳寺・徳融寺・安養寺・阿弥陀寺・五劫院・蓮長寺などの建築物が近世前期ごろまでのものと考えられる（『奈良市史建（築編）参照』）ことから、そしてまた、たとえば金駄寺の過去帳が慶長二年（一五七）の奥書をもつことなどからも裏付けられよう。

奈良町のうちで一番多い浄土宗寺院の多くは近世初頭に奈良に進出したもので、この派は徳川氏の保護もあって大きな抵抗もなく幕府直轄領に教線を伸ばしたものと思われる。奈良では浄土宗十三か寺といわれたが、それは、浄福寺・浄国院・普光院・安養寺・念声寺・念仏寺・崇徳寺・靈巖院・称念寺・聖光寺・光伝寺・興善寺・来迎寺で、いずれも鎮西派に属した寺であった。浄土宗寺院はなお十三か寺のほか奈良町の西部南部の農村部に進出しているが、現市域の山間部には全くみられない。

浄土真宗の大和進出といえば、まず上市飯貝の本善寺と下市の願行寺の両御坊を中心とする吉野川流域があげられる。これに反して興福寺の足元である南都では、さすがにその教線の拡大は困難であった。すでに蓮如が、その師であり縁者でもあった大乘院の経覚をたよって藤原郷に道場を開いたのにもかかわらず、そのちの展開はみられない。また平松町の乗明寺蔵の方便法身尊像の裏書に「興正寺門徒大和国添下郡平松村惣道場明応四年十一月実如」とあって、明応四年（一四九四）この地への進出を知ることができるが、以後しばらくはその動静を知り得ない。むしろ天文元年（一五五二）のいわゆる天文一揆が真宗教団の南都勢力を示すものであった。しかしこれも鎮圧され、織田信長やその部下となった筒井順慶の弾圧がこれにつづき、奈良ではことにその教団は伸びやんだと思われる。先記の乗明寺を例にとれば、同寺本尊は寛永七年（一六三〇）に下付されて興正寺門徒光慶寺下の道場となっているところからみて、このころから檀家も安定してくるのではなからうか。真宗寺院の分布は、奈良町についてみれば周辺部に多く、町外では平坦部に広がっている。

融通念仏宗も浄土教系の宗派で大念仏宗ともいわれ、開祖を良忍とするが、この派の勢力が伸びたのは元禄年間融観によってであり、河内平野の大念仏寺を中心として畿内に集中的に広がった。奈良町ではこの宗も近世初期にすでにみられ、徳融寺と法徳寺が大和の東西念仏寺といわれ、奈良町周辺の平野部から多少山間部にも進出してい

表82 現奈良市域の諸寺宗派別表

	奈良町	山間部 と周辺の 村	計
浄土宗	26	13	39
浄土真宗	7	30	37
融通念仏宗	3	24	27
真言宗	3	27	30
法華宗	4		4
律宗	7	9	16
華嚴宗	6		6
天台宗	1	2	3
臨濟宗	4		4
曹洞宗		4	4
黄檗宗		1	1
		3	3
計	61	113	174

明治12年「寺院明細帳」による

る。法華宗も寛文期に町に入ってきたとの伝えをも
っており、蓮長寺が同宗の太和一円の寺を代表する
ものであったが、同宗派寺院は奈良では割合に少な
い。ここに参考のため、巻末付表13をさらに単純化
した現奈良市域の諸宗派の表82をあげておく（『奈
良市史社寺編』参照）。

教 学 と 文 学

奈良と上方

十七世紀の末から十八世紀の初めにかけてのいわゆる元禄時代は、江戸時代文化の第一次の開花
期に当たっていた。そしてその文化は俗に元禄文化と呼ばれ、その特色を考えてこれを上方文化
といい、また町人文化ともいっている。そして当時において三都といえは、すでに江戸と京都と大坂とをさしてい
たことを思うと、上方の中心は京都と大坂とであり、したがって元禄文化とはいわば京坂文化ともいえるものであ
った。しかしさきに、中世から近世初頭にわたる時期の文化の中核は、京都と奈良と堺の三都であったと述べてき
た。一体奈良と堺とはどのようにして三都から、そして上方の代表都市から後退していったのであろうか。

堺は、大坂が城下町化する過程で堺町民の大坂移住があり、ついで大坂夏の陣には兵火にかかった。そのうえ十

七世紀の中ごろ以降、鎖国によって貿易港の位置を長崎に奪われ、宝永元年（一七〇四）の新大和川の開削によって、交通の要衝としての意味も乏しくなったために、ついに以前のはなやかさを失ったのである。

奈良の文化的活況は、主として中世寺社の伝統と郷民の成長にともなう商工業の発達によるものであった。そのため、かつて奈良を天下の奈良とさせていた寺社が、朱印地を与えられてその命脈を保つことはできたとしても、またそれ故にこそ幕府の権力にだき込まれて活力を失った以上、町民もまたそれに歩調を合わせていくのは避けられない運命にあった。城下町ではないから政治的な活気や武士の大きな消費があるわけもなく、そのうえ水陸交通の要地でもない。また晒や酒などのおもな産業もほかに大きな生産地が成長し、特別な産業といっても美術工芸分野のものが多く、封建統治の細分化にも災いされて後背地は狭いということになれば、近くに大坂の爆発的な商業的発展がある以上、町民勢力の前代以上の活躍は望むのが無理であろう。こうして奈良もまた文化の三都から退かねばならなかった。

堺と奈良の停滞に対して、江戸は政治の中枢であり、参勤交代制にも助けられて巨大な消費都市となった。京都は朝廷をめぐる公家社会と寺社と幕府最大の出先機関とが存在した町であり、奈良よりは成長した多くの町民を擁した都市であった。大坂は諸大名の蔵屋敷をもつ新興の商業都市であった。元禄の上方文化とは、この伝統の強さを誇る京都と、商都大坂の町人たちの活気ある経済力を中心として築かれた。それは、江戸が新興政治都市であっていわば寄合世帯であり、町人がなお十分には成長せず、文化的伝統も持たなかった以上、元禄期にはまだ文化の担い手としては未熟であったからである。

奈良が上方文化の中枢に坐していなかったとはいえ、元禄期まではそれでもなお寺社と町民による文化の伝統を誇ることができた。すでに述べてきたように、奈良の代表産業である奈良晒もこのころまではその生産高は伸びつ

づけ、大仏殿の再建を中心として町中の活気は盛りあがっていた。したがって、その限りにおいて上方文化を支えるその一翼を担っていたといえる。しかし元禄期を過ぎると、文運はようやく東に移り、上方自体が一般に沈滞化していくなかで、奈良もまたその色を濃くしていったのである。

学問の動向

封建権力者の成長にともない、その政治顧問的な立場に立った御伽衆としては、禅宗の僧侶が大きな位置を占めていた。この禅僧の中国思想ことに儒教についての素養が、実は政治に直接参考となったもので、幕藩制の確立期には林羅山に代表されるように、この学問がとくに重んじられた。やがて徳川氏による政権が安定してくると、この社会制度を支える封建イデオロギーとして、儒教がその役割を果たすこととなったのである。元禄期はちょうどこの体制を整える文教政策が確立した時代で、儒教のうち朱子学が幕府の学問としての位置を確保した。儒教がこのような役割を果たすこととなったのは、儒教とくに朱子学が、江戸時代社会の士農工商という封建的身分制を維持するのに好都合な思想であり、それぞれの分に安んじることを説く道徳思想であったことによるであろう。朱子学は確かに幕府の官学ではあったが、当時の封建政治を支えこれに参与した儒学は、朱子学派だけとは限らなかった。そこには陽明学派もあり、直接孔孟に帰ろうとするいわゆる古学の諸派、またのちには折衷学派もあった。しかしいづれにしろ当時の武士社会の学問は総じて儒教系統の学問であったわけです、武士の教養は儒教色にぬりつぶされていたといえる。このことは江戸時代の学問の主流は儒教であり、それが支配者階層であった武士の教学であったことを意味するのである。

儒教がこのような形で登場してきたことは、必然的に古代中世を通じてつねに学問や教育や思想として社会の諸方面に支配的な影響を与えてきた仏教教学の表舞台からの退場を意味する。そしてそれはとりもなおさず、仏教教学で近世初頭まで全国の中枢を占めていた奈良の教学の衰退を示すものにはかならない。元禄時代前後に公慶上人

を中心として東大寺復興はみられたとしても、その教学内容については、ついに江戸時代を通じて特筆すべきものをもたなかったのも、このような社会情勢の必然の結果でもあった。

しかも奈良は、新しい学問として思想界を風靡した儒教の担い手である武士不在の封建都市であった。奉行所関係者ぐらいいしか武士のいない奈良で、儒教学問の興隆が望めないのも当然であろう。元禄という文運興隆期に当たり、全国的には儒教諸派の学者が輩出していたが、奈良の近くでは芝村藩の藩校遷喬館が元禄九年（二六六）に戒重村に開かれ、享保末年（二七三頃）には郡山藩に総稽古所が創立された程度で、概して大和は天領・小藩の分立のためか藩校の充実したものも乏しかった。なお奉行所の明教館については次章に詳述することとする。また陽明学者熊沢蕃山が明石藩主松平信之の郡山移封に際して郡山に移り、延宝七年（二六九）から約九年間矢田山に寓居したが、その蕃山の学統もそのうち奈良ではついに求め難いのである。幕末であるが、川路聖謨が奉行として奈良に着任し、奈良には『大学或問』さえ所持する人がいないと嘆いているが『大学或問』とは蕃山の名著であった。

奈良には武士層が少なく儒学者もまたとくにあげ得ないとしても、儒教が江戸時代を通じて教学の主流であったかぎり、その道徳思想は社会の各層に浸透し、その教化のもとに儒教的発想の仕方が農民や町民の中に定着していたことは確かであった。私塾や寺小屋はそうなるための役割を果たした一種の教育機関であったわけで、教場が寺であり、教師に僧侶が多かったとしても、その教科は儒教系のものが多かった。『日本教育史資料』によれば、大和一国で寺小屋の数は三〇八か所と記録されているが、奈良町の分については遺憾ながら不明である。しかし寺小屋のことは史料に散見されるので、奈良にも相当存在したと思われるし、僧侶・神官の中には寺小屋の師匠であったものもいたにちがいない。ただ『奈良曝』に「能書手習子取所付」として、南市町の益屋市左衛門、南半田東町の中村又右衛門、川端町の永嶋所左衛門、納院町のみかたにや源左衛門、油留木町の安左衛門、鍋屋町の吉田嘉

兵衛、細川町の庄左衛門、城戸町の絵屋彦兵衛、内侍原町の清水伊右衛門、高島新開町の八兵衛の名がみえるので、元禄のころこれらの手習師匠があったことはわかるのである。

儒教系の学問のほかに江戸時代には国学・蘭学・心学などの学問がおこってきた。国学は元禄のころ日本の古典とくに和歌の研究から出発したもので、大坂の僧契沖はその優れた研究法で知られ、それをうけた下河辺長流は大和宇陀の出身、北村季吟門下の谷口元淡は郡山の人であった。しかし奈良はなお国学研究の舞台となることなく、幕末を迎えることとなった。蘭学は十八世紀の中ごろから興隆してきた西洋自然科学の受容をおもな内容とするもので、奈良がその門戸長崎と遠く、また藩医など蘭学に関心の深い人々との交流の場でもなかった以上、特筆するような蘭学者の出なかったのもやむを得ない。江戸時代中期におこった庶民教育の学問であった石門心学の分野では、手島堵庵が大和にその学を広めて郡山・山辺などに心学舎を開いていたから、多少はその教化は奈良にも及んでいたようである。なお天保ごろに奈良の医者で数学に通じた奥田有益があった。岡田宗春に暦法を学び、著書に「新篇算数記」がある。算学ではほかに「算法得幸録」の著者として岸通昌が知られ、関流の長谷川喜左衛門杜中の嘉永四年（一八五二）の社友列名の中に惣年寄の清水浪江熙房の名がみえる。なお算学者は当時寺社に算額をかける風があつて、五か谷の弘仁寺に文政十年（一八二八）のもの、安政五年（一八五八）のもの二面と、下山の円満寺に天保十五年（一八四四）のもの一面がある。文政のものは奥田政八門人中から、安政のものは石田算楽門弟中からの奉納である。石田算楽は神殿の人かと思われる。儒教以外の諸学問の領域では以上の人々が指摘されるくらいで、儒教同様に概して奈良は沈滞していたといわねばならない。

史料の採訪

江戸幕藩体制がひとまず安定し文治政策がとられ文運が復興するとともに、この体制の成立した次第とそれを合理化しようとする要求、あるいはわが国本来のあり方を明らかにしようとする意

図などから、歴史研究の気運が高まり、歴史の叙述には多くの成果がみられた。もちろん儒教の影響をうけてこれらの多くが倫理史観・名分史観にもとづくものであったが、国学が盛んになると、日本固有の姿を明らかにしようとする立場も大きな力となってきた。また史料の解説において文献学的考証学的方法に優れた学者も出てきた。さてこの歴史研究のための史料の採訪ということになれば、歴史の伝統に恵まれ史跡や史料の豊富な京都や奈良がその舞台を提供することになるのは当然で、ことに史料が多く存在し、その保存もよい寺社や貴族がおのずから採訪の対象となる。長いあいだ寺社の都であった奈良は、ここで史料採訪の学者たちを招くことになり、これらの史料はやがて歴史の叙述に貢献することとなったのである。

奈良地方での最初の本格的な古文獻の採訪は、水戸藩の『大日本史』の編集のためのものであった。水戸の史臣佐々宗淳は延宝八年（一六〇）畿内南部の史料採訪に出発し、七月十日から奈良に入って一乗院の古文獻箱三〇余を調査し、年代記・蒙古の牒状・英俊の日記六〇冊・裏に詩の書写された具注曆など多数の記録をみることでできた。ついで宗淳は、大乘院の坊官二條寺主から長祿四年書写の『太平記』と文保二年書写の『保元物語』の寄贈を受けたが、春日文庫の調査は同意が得られなかったため、高野山へ赴いた。そのうち宗淳は紀伊・吉野などの採訪をすませ、十月再び南都に入って大乘院を中心に調査したが、大乘院でみたものは仏書や春日社と興福寺関係の古文書ばかりであったため、宗淳の目的にはあまり沿わなかったようである。そのほか春日社の社家では年代記や系図などを、興福寺東金堂では寺僧もみたこともない七帖双紙を精査することができた。なお、一乗院門主は東大寺に秘書として伝わる『東大寺要録』調査のための労をとったが、宗淳はそれらが仏事にかかわるものとしてあまり興味を示さなかったようである。宗淳はまた法隆寺・西大寺・薬師寺・唐招提寺などを二條寺主の案内で採訪し、三〇余日の南都滞在を終わっている。佐々宗淳は水戸史館の総裁となった学者であるが、寺院関係史料に注目しな

かったのは、儒教主導の当時として、また『大日本史』編集の趣旨からみてやむを得ないものであった。水戸藩からの南都史料の採訪としては、そのうち、元禄二年（一六九一）に大串平五郎元善の奈良近在にいた親類をたよっての調査があり、ついで五年に佐々宗淳がまたまたこれをおこなったのである。

江戸時代を通じて好学の名の高い加賀藩主前田綱紀（松雲公）もまた、図書の収集編集の業をすすめるにあたっては南都を無視することができなかった。加賀藩与力津田太郎兵衛光吉が書物調奉行として徒士数人とともに奈良に書籍を求めにきたのは、水戸藩のそれとほぼ同じころの天和元年（一六八〇）であった。光吉は綱紀の意思によって奈良奉行に幹旋を依頼して東大寺の蔵書をはじめ諸大寺を歴訪採訪したのであった。

江戸時代後期になって南都の文献採訪で有名なものは、松平定信の命によって実施された柴野栗山と屋代弘賢による寛政年間の調査であって、その紀行は弘賢の『道の幸』三巻にくわしく述べられている。栗山は寛政三博士の一人で有名な儒者、弘賢は国学者として知られ幕府に仕え、のち『寛政重修諸家譜』の編集にもあずかった人である。弘賢らは「都近きあたりにありとある古き筆の跡、うつしたてまつれ」との命を受け、寛政四年（一七二二）十一月十九日に京都から奈良に入り角振町の墨工岡村家に投宿した。翌日法隆寺への道すがら「奈良の町をはなれて、西に生駒山東に春日山三笠山わか艸山（くさ）みゆ、わか艸山は雪いとふかく、みかさ山はむら消たるなど、ゑに書たらんやうにて、えもいはぬけしき也」と風光に感嘆している。そして法隆寺・信貴山・多武峯などを経て二十九日再び奈良に入り、その翌日から調査にかかった。まず、東大寺では奈良時代の文書から公慶上人の大仏復興関係文献に至るまでを数日ばかりで採訪し、ついで般若寺・春日社・興福寺・一乗院・薬師寺・唐招提寺・西大寺・極楽院などで多くの史料を採訪し、八日に奈良を去っている。『道の幸』には、このときの採訪の行程などがさらに詳述されている。

このようなたび重なる本格的な調査が実施されたことは、奈良が史料の宝庫であり、その歴史のもつ重さの故であったことを物語る。このことは、幕末になって社会不安が増大してくるにしたがい、世上に広く歴史への回帰という心情が広がるなかで、奈良がただ単なる寺社の都でも産業の町でも名所の地でもなくて、日本の故郷として認識されることにつながるのである。

文学の題材

元禄の上方文化を語るものは、文学の分野でまず芭蕉と西鶴と近松とをあげるのが普通である。これら元禄の三巨人はもちろんいずれも奈良の人ではない。しかしこれら作家の奈良を訪ね奈良を題材とした作品は、やはり近世奈良の一面を語るものとして無視できないものである。

奈良はこれよりさき連歌流行の一つの中心であり、里村紹巴を生んだ。この連歌から、現実的滑稽を精神とした庶民的な生活詩へ展開したのが俳諧で、それは松永貞徳によって代表された。この俳諧は京都を中心として各地に広がったが、この貞門の俳諧もやがて形式化したため、これを庶民生活のなかに引き戻したのが西山宗因らの談林派の俳諧であった。ついで松尾芭蕉は、和歌・連歌の伝統と民衆の生活詩としての俳諧をあわせて俳諧詩を大成し蕉風を樹立した。芭蕉は伊賀上野の出であるが、そのことは伊賀が連歌の中心大和と隣接しているという地理的關係と無関係ではないであろう。しかし芭蕉を奈良に引きつけたのが古い仏たちであり年中行事であったのであるから、その紀行の文学は次節にゆずるとして、ここでは西鶴を中心に述べてみよう。

井原西鶴は大坂の富裕な町人で、みずから大坂町人に誇りをもっていた。はじめは談林派の俳諧師として文学界に現れたが、やがて浮世草子作家として精力的な活動を展開したのである。なかでも彼をとくに有名にしたのは町人社会の世相や人情を扱った浮世草子の類であった。

西鶴の『近年諸国咄』巻一のなかに「公事は破らずに勝つ」という見出しのもとで、昔藤原房前から納められた唐

太鼓の貸借をめぐって東大寺と興福寺とが争ったという話を書いている。また同書の巻二に「水筋の拔道」という題でお水取行事につながる一奇談を載せている。それは若狭小浜の身投女の死体が秋篠で用水池を掘ったときに渦巻きわいた水とともに現れたという話『奈良市史民俗概観』参照である。さらに二月堂に関する話を『懐硯ふところすゐり』の巻三に「枕は残る曙の縁」と題して記している。三条の酒屋の伝十郎という美男が手貝町の白銀屋の娘に云い寄られたのを嫌い、一方花園町の墨屋の娘おしなという美人が酒屋の息子に懸想されたのを気にやみ、二人ともそれぞれ二月堂に思い切りらせるように願をかけた。満願の日二人とも願をかなえられた証しとして枕を賜わった夢をみたが、夢さめてみると枕は一つだったので、二人は自分が頂いたのだと互いに争った。寺僧がそれをきいて、これは双方とも嫌いな者は願の通り止めて汝ら二人が一緒になるがよいというお告げだといったので、二人は夫婦となったという話である。西鶴にとっては、奈良の大寺は僧兵闘争の寺であり、厳肅な神秘的な伝説は浮世の物語となり、二月堂の観音はいきなはからいに人情味あふれるご利益をたれることになる。

さらに西鶴は奈良町の風情や町人の氣質を種々描いている。『好色一代男』にみえる遊廓のさまや『世間胸算用』の中の奈良の正月の描写などは、いかにも奈良のゆとりのある生活ぶりを示しているが、西鶴の眼には奈良の町民はどのように映ったのであろうか。『世間胸算用』に八助という魚屋が二〇余年も鰯の足を一本切って七本足の鰯を売っても奈良人は気付かなかった話や、晒布の代銀は何千貫目というくらいで、あまり大金すぎて追剥ぎもねらうのをあきらめた話もある。ほかに『置土産』には東大寺門前に住む仙人坊という異名の男が、五年間に遊里で七〇〇貫目を使い果たした話があるかと思うと、『俗つれづれ』には酔うと女房を追出すくせのある酒飲みの話があり、『日本永代蔵』には生活に窮した後家が頼母子の入札で家売りに出し、当たりくじの人に住宅を引渡ししてみずからは十二貫匁を受けとって余生を楽々と送った話を書いている。奈良がようやく名所としての性格を強

めてきたこの時代に、西鶴は京大坂と変わらぬ浮き世の奈良を、そしてことに奈良人の豊かさとおおようさとおめでたさを描写したといえるのである。

これに反し、劇文学で奈良がその舞台になることは近世ではほとんどないといわねばならない。これより以前、世阿弥が結崎座の出身であったためか、能楽には大和の説話を扱ったものが多く、奈良の物語をとり上げたものに『佐保山』『采女』『春日龍神』『野守』『大仏供養』などがある。このうち前の四者はいずれも世阿弥の作といわれ、江戸時代を通じて演じられたものであり、『佐保山』はもっぱら金春流で用いられ、『大仏供養』は金春流では『奈良詣』と呼んでいたものである。

さて浄瑠璃という劇文学の完成者としての近松門左衛門についてであるが、一〇〇編にのぼるかれの作品のうち大和に舞台を取るものは一〇編に満たず、ことに直接奈良に関するものはほとんどなく、この点は芭蕉や西鶴の場合とは非常に違うといわねばならない。ここに浄瑠璃としてもてはやされたものとしては、近松半二の『妹背山婦女庭訓』ぐらいをあげ得るにすぎない。これは、門左衛門の『大織冠』と題材の系統を同じくするもので、これに猿沢池衣掛柳と十三鐘石子詰などの説話を取り入れた五段一三場の大作の操劇で、奈良の皇居・春日野・猿沢池・神鹿殺しなどの場面がそのなかにある。この曲は明和八年（壬子）に新作上演され、一挙に竹本座を立直らせたという当たり作であり、この年に直ちに歌舞伎に取り入れられ、今日に至るまで歌舞伎の出物の主要作となっているものである。

このような形で奈良が文学のなかで扱われていたわけは、中世以来商工業の発達した先進都市としていまなお豊かな町民生活がみられる面と、寺社の都としての伝統からくる年中行事や古社寺のたたずまいによって名所の性格を強めてきた面と、この二重の特徴を奈良が持っていたからであった。そして元禄時代こそは、この両面がからみ

あつた時期で、このころを境に前者の面は漸次停滞退化の方向をたどるのに対し、後者の面が前面に押し出されてくるのである。江戸時代中期以後の奈良は、名所としての性格を強めるのであるが、しかしそのことに入るまえに、奈良自体の文芸と工芸とに触れておかなければならない。

俳諧の隆盛

奈良自体の、いかえれば奈良の人々の生み出した江戸時代中期の文学といえは、正直のところ日本文学史を飾るほどの作品を求めることはできない。しかし俳諧の分野では奈良はやはり一つを中心であつた。近世初期の俳諧といえは、松永貞徳の流派すなわち貞門の俳諧であるが、とくに大和に大きな影響を及ぼしたのは、その門人松江重頼であろう。重頼は維舟と号し延宝八年（一六六〇）に没した。京都の旅宿業者で大文字屋治右衛門といい、貞門七俳仙の一人といわれ、名著『毛吹草』を著している。大和ではそのころ郡山藩士であつた池田正式（まことのり）が貞門で知られたが、重頼と対立したといわれている。

さて南都については、寛永十九年（一六四二）刊行の『鷹筑波』に南都清右衛門定之の句があり、正保四年（一六五七）刊行の重頼の『毛吹草追加』に南都之住として宗珩の句が五句収められている。その一句に

かん鍋のつるにもなるや蒲萄酒（ぶどうざけ）

がある。定之または宗珩がどういう人であるかについては、まだ明らかではないが、宗珩はあるいは僧侶かともいわれる。しかしこのころから延宝のころ（一六七〇代）にかけて多数出された俳諧の撰集には、南都の俳人の作が相当数あげられているので、奈良ではかなりこれが流行していたと思われる。そうした雰囲気は郡山の岡村正辰の『大和巡礼集』『続大和巡礼集』ともなったのであろう。

いま試みに『続大和巡礼集』によってその中に名をたらねている俳人を整理してみると、つぎのようになる。句数一九四五、作者四九九人、そのうち南都の俳人は約六〇人に及び、当時の奈良の俳諧人口の大きさを示している。

表83 『続大和巡礼集』全5巻の

うち奈良俳諧師 寛文12年6月 荒川宗長板行

貞則	次好	15	尹	廣	1
友則	好	36	長	経	2
仲	久	2	光	吉	2
友	品	6	瀬	満	1
光	行	1	貞	躬	1
義	順	23	宗	玕	5
隆	計	4	宗	重	2
一	勝	10	知	直	5
柳	貞	27	重	元	1
正	以	15	一	全	1
古	俊	1	忠	政	3
祐	處	2	正	利	2
頼	忍	20	友	重	1
宗	満	1	道	弘	1
宗	知	5	似	柳	1
長	芳	5	定	躬	1
宗	政	7	則	重	1
豊	人	3	清	応	2
宗	冬	14	一	筍	2
清	俊	6	似	竹	1
藪	次	3	休	意	2
守	居	6	知	重	1
忠	次	1	古	桶	1
貞	治	2	守	種	1
乘	親	2	由	近	1
玄	重	7	快	雲	2
知	好	1	清	庭	1
貞	直	1	堯	□ (虫損)	1
利	之	2	不	知 作者	1
	永	1			

数字は句数

ついで元禄前後の時代になると、俳諧の世界では西山宗因の談林派が一時の全盛をみせ、やがて蕉風の時代がくる。宗因ははじめ京都の連歌師里村昌琢の門に入り、四三歳で大坂浪花天満宮連歌所の宗匠となり、約三〇年して江戸に移ったので、談林風俳諧はまず大坂を中心とし、やがて江戸におよんだのである。大坂ではこの派に小西来山が出るが、南都にはその来山の影響を受ける者が多く、そのうち、蕉風に近づく者もあったのである。元禄三年(一六九六)に出版された『俳諧の森』^(註)は京都の俳人露吹庵和及が撰したものであるが、同書では南都の俳人連中にあつてた書翰を序文としている。

(序) 内々より、京都の作者衆懷帯并発句ともみならひのため、書あつめくたし申様に御申越候へとも、出合の座懷帯乞求るにいとまなくうちすぎ申候、発句共へより／＼書とめ置申候、都鄙の作者の句とも少々御座候条、かきうつし進し申候

又予草庵に独り居侍る秋夕のつれ／＼につゝり置申候百韻をも書進候(より)これらを一覽有候而前句とのうつり付味三句のはなれのよしあしに氣をつけ御覽して、(中略)只座功をかさね次第、我人の句のよしあしも聞え感情もこもる物に候へは、隨(打掃)分うちすてす御はけみ專一奉存候、以上

午三月下旬

露明庵和及

南都
会連中

(跋) 這一冊は露吹庵和及法師、南都の風流方へ書つかへれしを、予清書せしに亦方々より見せよとあれば、こと／＼うつすもむつかしとて梓にちりはめて誂諧雀の森といふ事しかり

庚午
孟夏日

執事
風葉軒

これによってこの書の成立の由來がわかるとともに、南都の俳壇が京都の俳人を師としつつ盛りあがっていた状況がよく示されている。

同様の事情は、元禄四年(一六九七)刊行の『俳諧藤浪集』をみてもよくわかる。この俳諧集は南都の俳人一存軒簪竹の撰したもので、その序に「予嘗輯三京師俳魁我黒・和及・言水等俳諧歌仙及吾郷人所レ作興新而句秀者、以為三小帙一卷、鏤三諸梓、蓋方今之風格興思於此幾盡、初学之人不可レ不誂焉」と記している。ついで元禄九年(一七〇二)にはやはり奈良の俳人応々翁芳山の撰した『俳諧枕屏風』が出た。もちろん奈良俳人の句が多く、奈良関係の句一八八句、俳人は一存軒はじめ約五〇人に及んでいる。

その後、蕉風俳書として知られる『鳥のみち』上下二巻が元禄十年(一七〇三)に刊行された。撰者は素觴子玄梅で、同書の叙にも「玄梅のぬしは奈良の市辺に扉を卜ること久し、往昔芭蕉翁行脚の折からに疲をやすめて檢笠の掛場を見付、竹節のよせ處を定められけるも」云々とみえている。ついで『奈良ふくろ角』が宝永七年(一七三〇)に出ている。これは池西言水の後援によって奈良の隠士芦鶴が撰したものであった。また正徳五年(一七二五)には古梅園長



『鳥のみち』（天理図書館蔵）

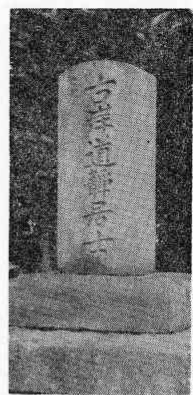
江によって『名むかしの水』が刊行された。「名匠の句得るにまかせて記し侍れば、品次の不同なるは見ゆるし給へし」とあって、玄梅・言水・芦鶴・方山ほか多数の人々の句が収められている。

いまこれらの俳書に名をつらねる奈良の俳人の数人について記しておこう。江戸時代中期の奈良俳人として第一に推されるのは前記の池西言水であろう。かれは慶安三年（1650）に生まれ、松江重頼について俳諧を学び、のち江戸に出て談林派の俳人と交じわり、晩年には京都に住んで蕉風に接近し、俳号を紫藤軒または風下堂と称した。かれ一代の名吟に

木枯の果はありけり海の音

という句があつて「木枯の言水」といわれたという。その著書も多く、『東日記』『京日記』『都曲集』などがあり、享保七年（1723）に没した。

奈良はこの言水の影響のもとで多数の俳諧をたしなむ者があつた。前記『奈良ふる角』に名を列ねる俳人には大和の人々が多いが、奈良の人として、随志・歳入・龍淵・頑水・芦月・湛水・鼓山・鶴士・爰之・水鷺・鉄水・一滴・楊巴・流指・衣奇・一存軒・友松・川龍・只言・梅山・露睡・是閑・喜扇・其及・友丸・随石・玉重・下山・喜春・芦鶴・松瑟・梅子・幽志・可維・淡蝶・蘭孤・只春・古風・松泉・洗我・友寿・流波・烟忌・道弘・秋独・卜山・布盛・流水の四十八人がある。おそらくは言水の風を慕う人々であつたであらう。その作風については次節にあ



村井勝九郎古道墓
(靈巖院)

げた奈良八景の句から推察することができる。

またこのころ南都俳壇を賑わしていた人たちの中に『奈良坊目拙解』の著者無名園古道があった。俗名村井勝九郎といい外科医を業とし升哲と号し、寛延二年(一七五九)に没している。つぎに金英舎梅七がある。梅七は酒屋の菊屋小坂治左衛門で、享保二十年(一七三五)に没し

ている。古梅園長江はまた玄々斎と号し、墨屋松井和泉掾元泰で、寛保三年(一七三三)に没し、平松古道は倍千と称してともに俳人として聞こえた。かれらは当時の奈良町民文化を代表する人たちであった。これらの人たちは多く大坂の小西来山の門流に属し、享保元年(一七二〇)に来山が没してから、江戸俳壇とも関係しつつ南都連中として活動し、奈良俳諧の全盛期を形成していた。享保二年に出た来山追善集である『木葉ごま』や、同十四年の来山一三回忌集『たつか弓』、また同十七年の『諸俳葉久母里』などには、これら南都町民の句が収録されている。また同十九年に村井古道・長江・梅七らは来山の遺稿を集めて『諸俳今宮草』を編集刊行しているのも、その活動ぶりをうかがわせるものである。

狂歌の流行

享保期を境にして俳諧はようやく衰え、これが雑俳化していくなかで、かえって盛んになったものに狂歌がある。狂歌とは本来狂体の和歌ということであり、その構想や用語などに滑稽・諧謔の意味を盛り込んだ短歌である。近世初期には狂歌は連歌師や俳諧師の余技であって、郡山の池田正式などはこの道でも名を知られた人であったが、やがて豊蔵信海や油煙斎貞柳が現れるとにわかに上方に狂歌が流行し、上方狂歌壇が形成され職業的狂歌師までが発生するようになった。

信海は男山八幡宮の社僧で、狂歌を貞徳に学び、茶を遠州に、書を昭乗に学んだという数寄者であって、元禄元



由縁齋狂歌塚（念声寺）

年（二六八）に没している。貞柳は大坂に住んで鯛屋の屋号をもち、禁裏御用の菓子司であり、信海の門下で、奈良には縁の深い人物であった。前記の古梅園松井和泉掾元泰が墨を朝廷に献上したとき、つぎの狂歌を作りそれ以後由縁齋と号したという。

月ならで雲のうへまですみのぼる

これはいかなるゆゑん成らん

その狂歌塚が現在川久保町の念声寺にある。かれはしばしば奈良に来て墨や酒などの狂歌をその歌集『家つと』に残している。

この由縁齋の影響でもあろう、狂歌の風は奈良におよび、杉岡宵眠らを出すことになった。宵眠は今小路町に住み、通称は丸屋勘兵衛、溪月庵と号し天明四年（一八四四）に没している。その歌集は『溪の月』で、その序文中に「ここに宵眠といへる翁あり、狂吟に名を得て近きをすて古きを慕ひ、その体まことに風雅なること、いにしへにもをさ／＼おとるまじ」と述べている。その歌一首をあげてみる。

大三十日より元日にかけて雪のふりしに

さて降りてくれゆきし年のをもしろし

かしらも白し元日の雪

宵眠の弟子に久世宵瑞があった。坤井堂と号して狂歌の旨を会得し、また書や華道にも通じていた。宵眠の『溪の月』も宵瑞の編集したもの



杉岡宵眠 久世宵瑞 橘宵甫墓
(瑞景寺)

が刻されている。

狂歌は天明のころ（十八世紀末）からその本舞台を江戸に移し、大田蜀山人らを出して爆発的な流行をみるのであるが、上方ではむしろこのころ以後は下火となっていた。

漢詩と戯曲

安永九年（七六〇）に藤本敬恭と寺尾子徳の二人によって、大和の人の詩を集めた『大和風雅』が上梓された。このなかから近世奈良の詩人と思われる人をあげてみると、つぎのようである。

三菩提院宮 一乘院二品真敬法親王
 広莊殿院宮 一乘院二品尊賞法親王
 後龍華樹院門主 大乗院隆遍大僧正
 釈曇化
 柳生芳徳禪寺
 釈真栄
 菩提山中地蔵院

堀池成愼 字道徹 号淇圃 東大寺吏人
 野田勝昌 字子繁 号松濤 俗称左中 南京手貝隠士
 多羅尾元近 姓大江 字青溪 号有渚 南都隠士
 源久繼 字伯孝 号鶴洲 土門氏 南都人
 佐元貞 字子亨 号玉潭 南都人

であるが、かれは『平城坊目考』の著者としてもよく知られている。晩年は大坂に移り文化八年（二二）に没した。つぎに橘宵甫がつづく。溪華堂と号し、のち薙髪して喜斎と改めた。狂歌の奥旨を得、門弟千人にあまるとその歌碑にみえる。文政七年（二五）没した。以上宵眠・宵瑞・宵甫の溪月庵三代の墓碑が現在瑞景寺にあって、それぞれ碑文と狂歌一首が刻されている。なお以上三碑の隣に岡本宗波の碑があつて同じく狂歌一首がみえる。また一刀彫の森川杜園も狂歌をよくしたようで、北川端町の普光院にある墓碑には、辞世の句として

罷出てあらぬ手業を世に残し さも恥しと身は隠れつる

藤野成胤	字子錫	号芳洲	稱監物	春日祠職	柳原玄章	字成幹	号蓮峯	南都人業医
大江元慶	字子龍	俗稱中書	号蘭草	興福寺衆徒	広瀬義雄	字三治	東市人	
菊岡元政	字僭倫	稱宰相	興福寺衆徒		膝 禹言	字之論	号琶山	西田村人
竹坊良慶	号淇水	稱按察使	興福寺衆徒		中村武駿	字元逸	稱玄亮	匹田村人
多田仲連	号蹈海	稱長門守	大乘院法主長吏					

當時の詩の一斑を知るためにその作一つをこの書から引用してみよう。

初春陪大乘教主宝池汎舟

多羅尾元近

短棹愛_ニ池_ヲ潤_ニ 況今氷雪融_ニ 猿迎_ニ投_レ果主_一 鳥誘_ニ探_レ梅翁_一

霞映鬼園日 浪含仙鳥風 春遊從_ニ此始_一 何負岸花紅

そのほかに詩人として知られた人には、古梅園の松井元規ならびにその子で俳人としてさきにあげた元泰らもあつた。総じて南都の文学者といえる人々は、やはり寺社関係者や上層町民、あるいは隠士とよばれた人が多かった。しかし幕末になると、奉行所に明教館がおかれた関係もあろうか、奉行所関係の人たちの中からも文人は出てくる。

演劇の方面では、大坂が盛んであった関係もあろうか、狂言作者として知られた奈河亀助が出ている。奈良の商家の出で「初め放蕩無頼、好て遊里劇場に遊び『戯曲小』」、河内の縁者に寄食して奈河を名乗り、大坂に出て並木正三に従つて狂言作家として立ち、正三没後約十五年間上方演劇界で活動した。その作には『競伊勢物語』『天下茶屋聚』『伊賀越乗掛合羽』『伽羅先代萩』『伽羅先代萩』『加々見山廓写本』などの名作がある。先代萩は伊達騒動を題材にした御家物演劇の総称であるが、安永七年（一七九八）に大坂で演じられた亀助の『伽羅先代萩』が好評を博したので、京都の浄瑠璃にも演じられたくらいであった。なお大坂の狂言作者奈河七五三助はその門人である。

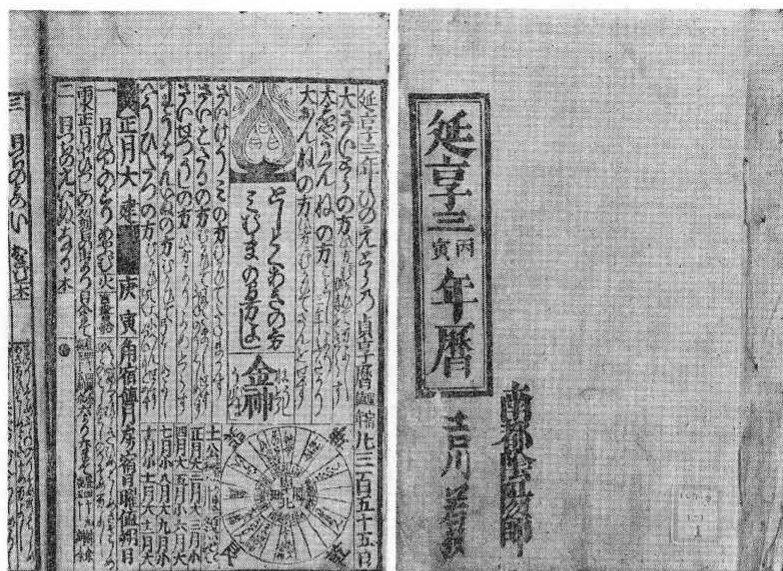
奈良 暦

奈良でいつごろから造暦と頒暦がはじまったかは明らかではないが、その始源を平安時代末期から鎌倉時代初頭に遡らせる説が有力である。中務省陰陽寮に属した陰陽師の一部が、律令制解体の過程で奈良に移り住み、占筮を業とするようになったという伝承（旧「吉川家文書」）もあるので、やがてそれらの人々によって暦が造られたと考えられる。

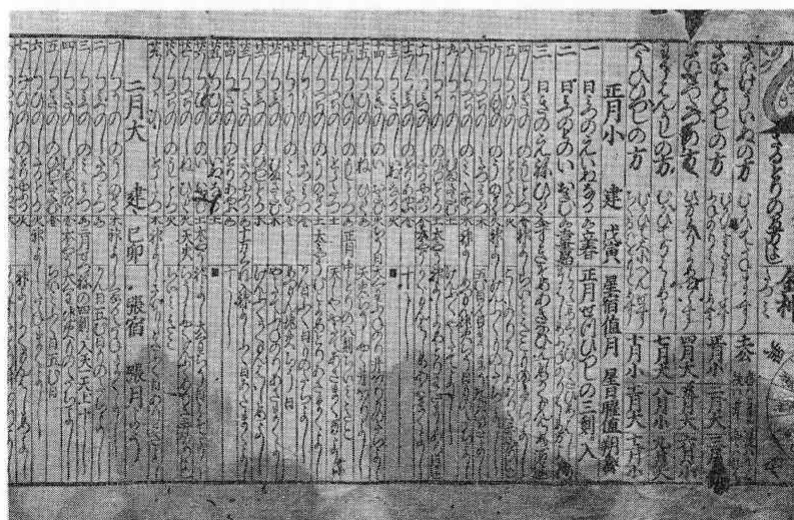
そして中世には、寺社の要求や成長する郷民の需要にこたえて頒暦が行なわれたらしく、奈良に住んだ暦道家賀茂氏の流れの幸徳井家から寺社に献納された暦（具注暦か）と、一般頒布用の暦（仮名暦か）の二種類の暦があったようである。幸徳井家は天文家安倍友氏の二男友幸が賀茂定弘の養子となり、十五世紀前半までに高畠の幸徳井に居をかまえた家柄で、陰陽師といわれて興福寺・春日社の占筮にかかわる諸行事に従事していたので、幸徳井家は春日社人とみなされ、一乗院門跡領などから知行を分け与えられていたようである。また「以三私料簡一造」暦（『大業録』日記目録）とあり、京都の暦と多少の差があった（『多聞院日記』）というから独自の暦を造っていたのであろう。

他方では、すでに応永十四年（四〇七）に最古の奈良暦といわれる片仮名暦が存在するが、中世末期には大和国内に広く売買されていたことは事実で、それは板行暦であり、その原本は幸徳井暦か京暦であったと思われる。そしてやがて京都の摺暦座（大経師）の支配下に入って頒暦に従ったもので、天正九年（二五二）には版暦支配の勅裁を受けている（渡辺敏夫氏『日本の暦』）。

ついで幕藩制社会の初期には、造頒暦のことは中世以来の伝統をもつ京都大経師家にまかされていたらしく、大経師家は陰陽寮暦博士の作る暦をもとして版行し、これを地方の暦師にわけて頒暦させていたと考えられる。このことは、明暦四年（二六六）に伊勢の山田と奈良の暦師が独自の版行の認可を願った際、京都所司代がその版行権を大経師家のみに認め、両所の暦師が籠舎を命じられたことでも察しられる。したがってこの段階では、幕府は



南都暦延享3年（吉川加じ氏旧蔵）



写本暦貞享2年（吉川加じ氏旧蔵）

まだ造頒曆のことを直接には掌握していなかった。しかし天和三年（二六三）に陰陽支配が土御門家にゆだねられ、貞享元年（二六四）に安井算哲（浜川春海）による貞享曆が採用され、幕府の天文方が設けられるに至って、作曆権は天文方に移ることになった。そして天文方での曆の作製は、江戸・伊勢・三嶋・奈良・会津・京都大経師の六か所の曆師に限られることになった。このとき曆は天文方から大経師に渡されて写本曆が作られ、これが幕府諸機関をとおして各地の曆師に配られる仕組みができたのであって、奈良曆師も奈良奉行所から写本二冊を受け取り、これをもとに版行し頒曆に当たったのである。ここに幕府の造頒曆の支配権が確立した。

『明時館叢書』の巻四によると、大経師から納められる写本曆は二〇巻、そのうち江戸に七巻、伊勢に三巻、奈良に二巻、三嶋・会津に各一巻その他となっている。

さて貞享改曆のころの奈良曆師の数は明らかではないが、曆師を兼ねていた陰陽師の数は表84のようで、宝暦四年（二七四）の改曆のころには十四軒に減少している。そして奈良曆師による頒曆には二つの型があった。一つは売曆

表84 近世の大和陰陽師

		貞享年間	近世中期
奈良町	陰陽町	17 ^人	14 ^人
	野田山上村	1	0
	内侍原町	4	4
	菖蒲池町	2	1
	北小路町	1	0
	奥芝辻町	3	3
	坂新屋町	2	0
	南半田西町	1	0
	十三軒町	0	1
	南城戸町	0	1
添上郡	—	9	
平群郡	—	3	
宇智郡	—	2	
合 計		(31)	38

貞享年間のものは『奈良曝』から、近世中期のものは藤田祥光氏の「奈良名産史」に引用された「高木又兵衛諸事録」からとった

で、宝暦改曆以後これは山村・中尾両家に限られていた。もう一つは賦曆で、陰陽師がそれぞれの檀那をまわる際の土産物とするもので、両家以外の曆師の頒曆はこの方法であった。この両者の利害は一致しなかったようであるが、旧「吉川家文書」によると、明治三年（二六〇）になって、総頒曆数の三分半を山村・中尾家分、残り六分半を賦曆分としている。なお同文書に

奈良の美術

江戸時代に知られた画家で奈良に画蹟を残した人をあげてみると、はじめ郡山に住みのち京都に移ったが、一時薬師寺の地蔵院にいたともいわれる画僧古磻明蒼がある。古磻は享保二年（一七二一）に没したが、この間薬師寺の「薬師寺縁起絵巻」や浄国院の「大経曼荼羅」、またとくに有名な「大仏殿虹梁木曳図」（口絵）の長巻を残している。ついで宝暦八年（一七五八）に没した郡山の柳沢里恭がある。里恭は淇園と号し、柳里恭の名で知られ、奈良にもその作品が多い。そのほか興福院や円照寺に襖絵を残した京都の渡辺始興は、光琳派から円山応挙につらなる中間にあった大和絵画家として知られ、薬師寺に多数の襖絵を画いた長沢蘆雪は、応挙を師と

美術工芸

も献上し、その後売暦や賦暦にまわるわけで、慶応四年（一八六八）の奈良暦師の頒暦願出数は表85のとおりであった。その頒暦範囲は一応大和一国となっていたようであるが、実際は山城・河内・摂津・紀伊・伊賀などの近隣諸地方へも進出していたことは明らかである。このような型態は明治三年（一八七〇）ごろまではつづいていたのである。

表85
慶応4年 奈良暦師頒暦数

暦師名	頒暦願出数
尾村本	4,000冊
中山藤	2,500
藤本美濃	2,500
山本木	1,800
藤本木	1,450
吉本	1,200
藤本因幡	1,200
藤本石見	1,000
藤村	1,000
藤岡	600
中川	500
	400
合 計	18,150

旧「吉川家文書」「仲間方毎年諸入用帳」から作成

よって幕末の造頒暦の情況をみるとつぎのようである。毎年七・八月に下げわたされた写本暦をもとに版にして、九月中に幕府天文方に校合してもらい、十・十一月までに校合済みの暦本と発行の許可を得て新暦を刷り始める。でき上がった新暦は土御門家へ百冊ほどを献上し、奉行所と掛りの与力・同心へ

する京都で名のあった画家であった（『奈良市史
美術編』参照）。これら奈良と縁故のあった画家のほか
に奈良の人としては、文化年間に角振町に住
んでいた菊谷古馮がある。大簡堂葛陵と号し
円山応挙に学んで花鳥の絵をよくしたと伝え
られる。また興福寺修南院の代官であった内
藤其淵は、絵を葛陵に学びよく四季の鹿の姿
態を描いた人で、初め水門に住み、のち芝突
抜に移った。そのほかには画だけでなく詩文
書にも優れていた長谷雨蕉がある。頼山陽と
交遊があった人で南半田に生まれ押上町に住
み、安政元年（一八五〇）に没している。いま五
劫院に墓碑があり、裏に明教館教授佐々木絢
の撰文が刻されている。

彫刻についてみれば、やはり元禄の東大寺
造営を中心として幾つかの優れた作品がみら
れる。しかし、その作家たちは京都七条仏所
系かと思われる帥法印堯海、京都の大仏師を

名乗った法橋朝慶、難波に居住した法橋性慶など京坂からきた人たちが多かった。だからといってこれら仏師たちが奈良と無縁な外来者というのではなく、寺社の都の伝統をもつ奈良とは何らかの縁に連なる者ではあった。性慶は「大仏師椿井民部性慶」と記しているように椿井仏師の系統を引くようであり、そのほかに仏師法橋順慶・賢慶らの名もみえるが、これらの人々も東大寺とはとくに密接な関係にあったようである。

江戸時代中期にはまた特異な作家として生駒宝山寺の湛海があった。かれは伊勢の出身であるが、真言と戒律をきわめ生駒山を修行の道場としたのであるが、みずからが拝む仏像を自分の手で彫刻した人で、多数の素人ばなれの優品を残している。奈良では現在西大寺や押熊の常光寺あるいは唐招提寺などに歓喜天像や不動明王像を見ることが出来る。

工芸品としては転害の源三郎の蒔絵や松井道珍の墨、あるいは松本与一郎の春日藤の織物などがあり、いずれも名産として注目すべきものである。（『奈良市史』美術編参照）

奈良人形 奈良人形は、現在は一刀彫の名で呼ばれ、その素朴ななかに一刀の味を生かし、力強さを秘めたおこり 趣が愛好され、奈良の工芸品として全国的に有名なものになっている。

奈良人形のおこりは古く、平安時代末に春日若宮祭が挙行されたとき、田楽の用具の一部である笛吹法師のかぶる笠と、田楽頭屋のもてなし用の盃台がつくられたが、この盃台の上に人形をかざったのがその始まりであると考えられている。（岡野家先祖由緒書）。しかし一部には、奈良人形を宝永のころの岡野松寿が創始したものとする説もある。

森川杜園の「人形由来」には、

徳川三代將軍春日神社祭典ノ時嶋台ニ高砂尉嬬人形ヲ飾ル、又田楽笛吹役ノ笠飾ノ花ニ尉嬬ヲ置事ヨリ創ル

とあり、『大和人物志』にも、ほぼ同様のことを記し、創始者は西御門町の初代岡野平右衛門であろうと述べてい



田楽笛吹法師の笠と盃台
「春日大宮若宮御祭礼図」

る。おそらく奈良人形の源流はやはり平安時代に遡り、中世を通じて作られたが、江戸時代初期に岡野松寿が製作様式を完成したものと考えられるべきであろう。

鎌倉時代の奈良人形については史料を欠いているが、室町時代以降については多くの史料があって、その発達のあとをたどることができる。それらによると、若宮祭における田楽の笠や台の装飾として、興福寺専属の本座・新座の二座が年々競って豪華な彫刻をつくっていたことがわかる。また中世も末期になると、本来の田楽とは関係なく、愛玩用あるいは観賞用に用いられることがしだいに多くなったようである。

安土桃山時代に、若宮祭に使用された奈良人形についての記載が『多聞院日記』にみえる。天正十年（一五八二）五月、明智光秀が接待役となって安土城で饗宴がおこなわれたとき、大乘院門跡から碁・船の祝言・風流台などを、学侶からは銀・截金を用いた盃台に張良のあやつり人形を飾ったものを献上した。そして、大乘院からの献上物は信長らに喜ばれたが、学侶からのそれは気に入られなかったと記している。ついで同日記の同十一年十一月の項には

笛ノ笠二ノ内、一ハ吉備ノ大臣婦朝ノ処、一ハ八仙ノ所也、十五石ノ入目云々、見事ナ人形十二ツ在之、惣フクリン也とある。

天正十六年（一五八八）九月には、徳川家康が奈良に来て、興福寺の寺内に宿泊したが、このとき、寺では西王母の人形を飾った盃台を贈っている。また同十八年（一五九〇）五月、大政所が奈良へ来たときには、孫へのみやげとして

「二尺三尺の車ヲ作り、堀川御所夜討ノ処、馬・人形屋作以下、金物・ホリ物・作花尽美、奈良中ノ細工ヲ寄テ金藏院ニ於仕立」ている。さらに、岡野松寿保徳の「奈良人形製作由緒沿革記」(岡野蔵和弘氏蔵)には、岡野家が秀吉への献上物の製作にあたったことを記している。

奈良人形は、もともと二〇年ごとに改築される春日神社の杢の古材を材料として使用することを本体としたもので、そこから人形師を杢物師あるいは杢物屋とよぶことがおこった。そして、大乘院・一乗院には座があつて四五人の杢物師がいたが、江戸時代に入って興福寺が衰えたことも関係して、中期になると杢物師は岡野松寿家が独占し、その作る人形も形態や大きさが固定してしまつた。しかし、江戸時代初期にはなお多様な人形が作られており「官符衆徒記」(竹林齋氏蔵)には「盃台ハ彩色人形和田義盛ノ処、木色台鷲ニアリ」(寛永二十年)、「盃台三出ル、人形高砂ノ処有之、一ツハ鳥、一ツハ花計リナリ」(慶安三年)、「人形三ツ花月ノ処」(明暦元年)など、いろいろと趣向をこらしてつくられたことが記されている。

岡野家と森川杜園

岡野氏は、室町時代からの杢物師の座の一人で、右衛門太郎(のちに平右衛門)の子杢物屋平右衛門のころから代々松寿と号し、元禄のころから奈良人形の製作を独占するようになった。初代岡野松寿は人形の形態を高砂と猩々に限定した。高砂は翁・嫗とそれに脇として三大臣の五つ人形のものであり、猩々は三人で、前者は院家以上、後者はそれ以下に贈るものである。二代・三代の松寿も名手として知られていたが、五代松寿の妻房(寿貞尼)は、四代松寿の娘で、他家から入つた夫にかわつて人形を作り、その妙手であつたという。

江戸時代後期に活躍した保久・保伯・恒徳のころが岡野家の最盛期で、芸術的にもすぐれた作品がつくり出され、また名産としての奈良人形の名が全国的に高まつた。この三代について「岡野家先祖由緒書」には、つぎのよう

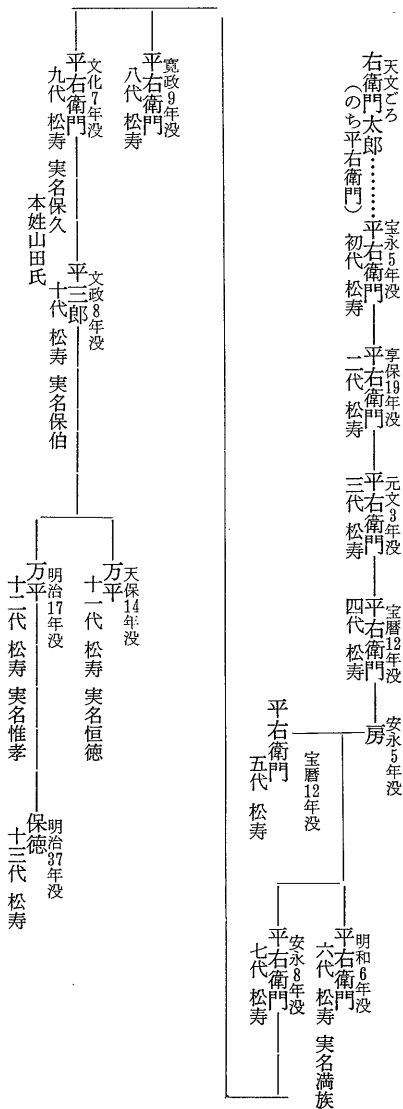
(保久) 山田氏ヨリ入家シ一家ヲ起シ彫刻ヲ改良ス、名ハ松寿保久ト云フ、保伯ノ父ナリ、奈良人形彫刻ノ銘人ナリ、最
後ノ名譽ヲ博シタルハ此人ニ止マル、此頃ヨリ彫刻ニ銘ヲ付シタリ

(保伯) 父保久ニ勝レル銘人ニシテ、又絵モ能クス、長沢蘆雪永ク食客タリ、京都人物誌ニ出タリ、画名漁月ト云フ

(恒徳) 彫刻ノ銘人ナリ、耻ト云フ字ヲ銘ニ付ス、又画モ能クス、平安人物誌ニ出タルハ此人ナリ、祖仙ト云フ猿ノ銘人

ハ永ク食客ニシテ、雨氣ニハ春日山林ニ入りテ猿ヲ真写ス、日々松寿ノ実母ニ頼リテ弁当ヲ乞フ

岡野氏系図



注 岡野氏家系は『大和人物志』をはじめ保伯の子を保久とする説が流布して
いるが、岡野保徳の「岡野家先祖由緒書」によって訂正した。

もともと田楽に用いるものとしておこった奈良人形は、前述のように早くから上流社会の贈答品として使用されたり、また愛玩されたりした。しかし、田楽に用いられた人形も、祭礼後に関係者にわたされて愛蔵された。さらに江戸時代後期には、盃台や笛吹笠のほか一般の嗜好に応じた根付・香合・置物などや大形のものも作られるようになった。

森川杜園は、奈良人形の従来の型をやぶり、写生に重点をおいて、これを単なる民芸品から芸術の域に高めた人物として有名である。杜園の先祖は、筒井家の家臣であったが、添上郡横田村に帰農し、父喜右衛門の代になって奈良の福井町に移り住んで米穀商を営み、のちに井上町に移って、中新屋町の晒布問屋鮎屋瀬川吉兵衛方に出入して同家の銀方の周旋に従事し、また紀州藩の銀方御用を勤めた。かたわら公事宿を営み、角の中に八の字を書いた



奈良人形『大日本名産図会』

銘物はさつと彫りたる奈良人形

これぞ春日の作といふべし

ナニワ染雲

細工をも少しぶこつに見ゆれども

きはよさそふなならの人形

一 雛

根付にも奈良人形の手かるさよ

はつても外に此のかたはなし

一 清亭魚鱗

行末も猶あをによし奈良人形

尉と諸にも色とりをして

庭 茂

印を用いたので、世間では角八と呼んだ。杜園は文政三年（一八二〇）喜右衛門の長男として井上町で生まれ、幼名を友吉といった。友吉は秀才のほまれ高く、学業のかたわら絵と彫刻に興味をもち、天保三年（一八三二）一三歳のとき、はじめて円山派の内藤其淵について絵を本格的に学びはじめ、さらに四条派をも研究した。「春日お七夜真図」をはじめ、そのころ其淵に学んだ粉本が多数現存している。瀬川吉兵衛の依頼によって描いた「梅林の図」、関甚吉の依頼で描いた「山水の図」、山田八郎右衛門重高の肖像など、かれが絵に熱中した若年のころのものであろう。奈良奉行梶野土佐守良材は、友吉の才能を認めて、御用絵師にとり立て、一七歳のとき扶疏もくしゆの名と杜園の号とを与えた。

天保八年（一八三七）一八歳のとき、杜園は彫刻をもつて身を立てることを決意したといわれる。『大和人物志』には詳細にその精励のさまを述べている。杜園が彫刻に志した当時の岡野家当主恒徳と杜園との関係については諸説があるが、杜園が直接岡野家に弟子入りしたのではなく、恒徳の指導をうけ、九代・十代の松寿の作品、ついで二代

・三代の松寿の作品を模作し、一方で写生にもはげんで、彫刻技法を磨いたものであろう。杜園より三歳若い郡山藩土瀬谷桃源（通称甚平）も、このころ杜園とともに二代・三代松寿の作品の模作に精を出している。しかし桃源は武士の余技として彫刻を手がけたもので、時間と費用を惜しまず、初期には杜園に匹敵する作品を作ったが、のち次第に技量の差が出てきたといわれる。なお桃源は、明治維新後に本職の奈良

人形彫刻師となった。

やがて杜園は自己の作品に自信をもつようになったらしく、杜園家に秘蔵されていた二五〇六歳のころと思われる作品に、

三十番 金春流鶴亀

四十八番 金剛流石橋

井筒上段舞四段目掛

目出度出来候

とみずから記している。また、かれは狂言師としても才能をあらわしており、三職あるいは三職分と称して、絵画と彫刻・狂言とをあわせて修業した。嘉永三年（一八五〇）三一歳の杜園は、家を弟の吉之助に譲り、中新屋町に居住してもっぱら彫刻を業とするようになった。このとき、一乗院宮尊応法親王から杜園の二字の染筆を下賜され、これを軸に仕立て、また額面に模刻した。

そのうち、杜園はますますその名声を高め、安政三年（一八五二）三七歳のとき、春日若宮大宿所屬となり、同時に春日有職奈良人形師を命ぜられ、毎年神事式田楽法師の笛吹笠および嶋台・人形などを調進するようになった。四二・三歳のころ、与力橋本権兵衛政方の古稀祝いに、金春流高砂の後仕手一尺あまりの置物を六一個作製の依頼を受けたが、このときの作品が今日三八番まであつて各方面で愛蔵されている。

慶応二年（一八六六）杜園四七歳のとき、皇室から彫刻奉獻を命じられ、舞楽納曾利・奈良人形置物を調進し、名声が中央にまで及んだ。またこの年、春日若宮神前玉伏の白鹿を調進し、さらに白鹿百鹿を刻みはじめた。この百鹿は全部完成しなかったらしく、文献には三〇数体が記録されており、うち一〇数個が奈良に残されている。

明治維新後、杜園は一刀彫の彫刻家として明治二十七年（一八九四）に没するまで活躍した。杜園の彫刻の作風につ

いては、明治初年杜園五〇歳ごろまでを前期とし、一刀彫の妙味がこのころ完成されその極致に達した。杜園が正倉院宝物の模品をつくったところからが後期で、技はますます冴えてきたが、もとのような豪放簡素な趣は少なくなつたとされている。

赤 膚 焼 赤膚山は、大和の名所の一つとして『類字名所名歌集』(元和三年一六二七年)や林宗甫の『大和名所記』(天和元年一六八一年)などにあげられているが、いずれも郡名を明らかにしていない。赤膚山の位置をはじめて明確に

したのは『大和志』(享保二十年一七三五)で、「在^リ五条村西^ノニ」、兀然一丘赤土不毛」と記しており、これがそののちの諸書の赤膚山についての記述の原典となった。たとえば、谷川士清の『日本書紀通証』(延享四年一七四七年)には、「赤膚ハ大和国添下郡五条村ニアリ」とあって、赤膚山は五条山をさすものとしている。近代に入ると、赤膚山すなわち五条山、または五条山別名赤膚山という考えが一般的となった。しかし、田内梅軒の『陶器考附録』には、

遠州時代は赤ハダ山の土を以て造る。土黄にしてこまかなり。堯山公再興の時ハ赤ハダより半里程脇なる五条山の土を以て造らせる。土黄にして赤きふありてあらし、白土もあり

とあって、別の地名としている。

赤膚山の位置は、享保年間初版の「大和国細見図」に記されているが、五条山の地名は、三松寺の過去帳にあらわれる天明年間のものが初見である。これらのことから、旧平城京の西方の丘陵が古くから赤膚山とよばれており、やがてその中心部にあたる「五条山」がこの丘陵を代表する名としてよばれるようになったものと考えられる。

いわゆる赤膚焼のおこりは、天正十三年(一五七五年)豊臣秀吉の弟秀長が郡山に入城し、郡山の町づくりをすめたとき、常滑^{とこなめ}の陶工与九郎を招いて東・西・中の三窯を開かせたのはじまる。そのうち、小堀遠州や野々村仁清^{にんせい}などによる陶技の指導もあって一時栄えたのである。遠州と赤膚との関係は秀長の郡山入城に従ってここに来た武士

のなかに小堀政一（遠州）がいたからであるという。ここから、赤膚は、遠州七窯の一つとされ、また「遠州好み」などといわれた。田内梅軒の『陶器考』（明治十六年）には、「遠州好七窑」として「志戸呂・膳所・上野・高取・朝日・古曾部・赤膚」をあげ、

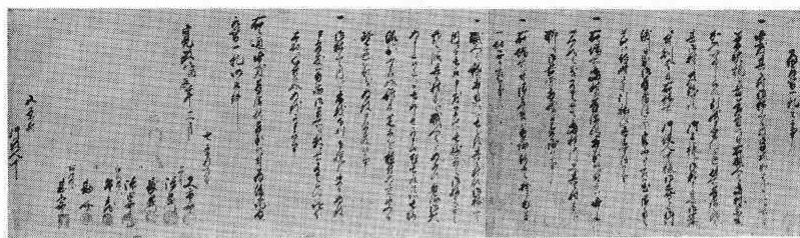
一 赤膚 和州郡山 赤ハタ山土 遠州印 赤膚山 赤ハダ 文字太シ（中略）
一 寛政中再興 五糸山土瀬戸陶工伊之助次兵衛
印 赤膚山 赤ハダ 文字細シ

と記されている。またこれより古く、金森得水の『本朝陶器攷証』（安政四年刊）には、

一天正慶長の頃、大和大納言秀長卿思召にて、尾州常滑村より与九郎と申者御召よせ、窑相立焼はじめ、其後京都より治兵衛と云焼物師下りて焼立、夫より近來松平甲斐守様御隠居堯山翁、内々御世話有之候よし、何事やらん度々留窑に相成候よし、窑元は添下郡五糸村と申所にて土も五糸山より取り候との事、其外委細事は分りかたく候

とある。これらが赤膚焼秀長起源という通説を代表するものである。また、仁清については『工芸志料』に、「正保年間 郡山に於て製する所の者なり。京都の仁清此の地に來り始めて窯を開き、工人に教え 器物を造らしむ」とある。

しかし、秀長や小堀遠州が、赤膚窯を開いたという確証はなく、また与九郎在銘の遺品は現存するけれども、それと常滑の陶工与九郎を秀長が招いたということと結びつける史料も残されていない。このころ赤膚の地には、奈良風炉が焼かれていたのに、それとの関係について全く触れられていないのも疑問である。『陶器考』には遠州印の銘印があげられているが、これを確認する作品は現存しない。『和漢三才図会』（正徳二年）「大和国細見之図」（享保二年）「昌鷹の作品にも赤膚焼のことばは全く用いられていないので、赤膚焼の名称は、郡山藩主柳沢保光（堯山）が寛政

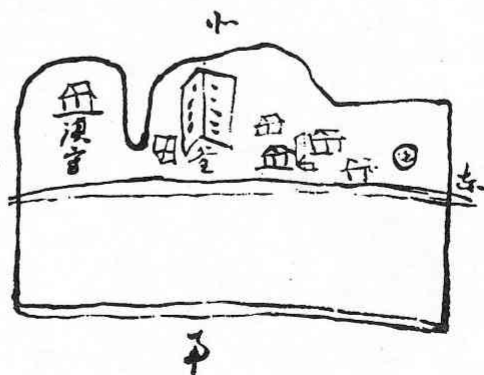


赤膚焼に付き五条村へ差出した文書（吉田貞治氏蔵）

十二年（一八〇〇）に再興した以後に使われるようになったものと考えられる。しかし一般には堯山再興以前を旧窯と称し、以後を新窯と伝えている。

このように考えると、赤膚山には、奈良風炉の伝統的な製陶が、時により盛衰はあったであろうが引きつづき続けられており、そこへ伊之助・治兵衛が来てこれらの技術をも吸収して赤膚焼を創始し、また柳沢堯山の保護を受けたとみるのが正しいようである。伊之助・治兵衛による再興というよりは創始の時期については、『陶器考』

などでは寛政十年（一七九八）としているが、寛政三年に初代治兵衛が死んでいるので寛政初年ごろとみるのが正しいとの説もある。また『本朝陶器攷証』では治兵衛らの陶工が前後して五条山へ移住して窯を開いたもので、堯山が窯を保護しはじめたのが寛政十二年ごろのこととしているが、堯山の隠居は文化八年（一八二〇）のことであるから、年代をもっと繰り下げねばならないという考え方もあり、三松寺の治兵衛家過去帳に「天明三年（一七八三）、了幻童子三月廿六日五条山惣兵衛」とあるところから、治兵



赤膚焼墨引図（吉田貞治氏蔵）

衛の五条山入りは天明以前であるともいわれる。

さて、赤膚焼再興期の事情を示す史料として、吉田貞治氏蔵の「為取替一札之事」という文書および墨引図一面がある。内容は、七条村の庄屋・年寄らが五条村の村役人たちにあてて、五条村の赤膚山にいた焼物師たちが七条村の宗旨に加入したので、別紙墨引のとおり地所を拝借する。これについては、土をとるときには土砂留の差支えがないよう貴村に願ひ出させるとともに、跡に雑木や芝を植えさせる。また木の枝をとったり、下刈をしたりなどは決してさせない、などといった点について約束するという意味のものである。

これらの文書は寛政八年（一七九六）に五条村の赤膚山にいた焼物師らが、七条村三松寺の檀徒となつたので、両村間に土地の貸借関係が生じたことを示しており、この年を赤膚焼再興の時期と考えたいが、三松寺過去帳にはこれより約一〇年古くから同寺が陶工の菩提寺となつていたという記録もあり、若干の疑問が残る。また、五条村にいた陶工たちがなぜ七条村の寺を菩提寺としたかといういきさつは不明である。あるいははじめ七条村に住みつき、菩提寺をそのままにして寛政八年に五条村に移つたのかもしれない。

青木木兎と 郡山藩主柳沢保光（堯山）は、陶工伊之助・治兵衛を招いて窯をおこし、寛政十年ごろから、郡奥田木白 山城内で手作りの楽焼をはじめ、赤膚山の陶工たちへの保護奨励もおこなつたものと考えられ、赤膚焼の称呼もまたここからおこつたようである。

青木木兎（もと）（安永七年一七七八—安政六年一八五九）は高取藩医佐倉三及の子として生まれ、文化十四年（一八二七）に郡山藩医青木宗半の養子となり、天保四年（一八三三）にその名跡を継ぎ、藩主の保光・保泰・保興・保申に仕えて郡山殿医御起筆頭となった。禄高一二〇石・勤料二〇俵であった。その宅は茶園にあり、茶を好んだことから楽焼茶碗を作るのに巧みで、堯山に作品を献上した。堯山は戯れに「汝の製するもの蠱（組）にして昼間見る能わず、宜しく木兎焼（もとやき）と称すべし、蓋し木兎（みみずく）

は昼間物を見る能わざるの故なり」といって、「木兎」の号を与えたと伝えられる。

木兎は、享和から安政にいたる約五〇年間にわたり、殿医のかたわら陶器作家として活動し、奥田木白に対しても技術指導をしたらしい。木兎とともに楽焼を作った人々に、郡山堺町の小西三良右衛門、郡山魚町の初代大坂屋太兵衛（泌斎）、西大寺屋中西儀助などがある。中西儀助は西大寺村の人で、文政年間に添下郡九条村（天和郡山形市何知町）に移り塩干魚商兼質商を営み、堯山が窯を再興してのち、赤膚焼がふたたび衰えた時期に九条で築窯し陶器製作をおこなった。儀助の子儀平も父のあとを継いで製陶活動をつづけた。

三松寺に、文化十二年（一八五〇）十月付の「一札之事」および同十四年（一八五二）六月付の「五ヶ年御譲渡申金運上之事」の二通の釜運上銀に関する文書が現存する。これは五条山の運上銀を扱っていた住吉屋が祠堂銀を借りた文書と、尾張屋が三松寺に五年分の運上を譲ったという文書とである。後者のうち、釜運上についての説明の部分に、

一 五条山釜運上 沓ヶ年

但シ沓ヶ年ニ貳拾金出来申候、沓釜ニ付銀拾八金宛運上銀、内拾四金は御上様相納候事、尤御上様表江年拾貳釜と相定め沓釜ニ付拾四金宛都合沓ヶ年分運上銀百六拾八金宛上納可仕度

とあり、この運上を所持していた尾張屋仙太郎が二貫六六〇目で三松寺に五か年の運上を譲渡している。

これらの文書により、そのころの窯は一か所で入会窯かと考えられること、一年に二〇釜できたこと、また、税負担額などを知ることができる。また、これらの文書には、前者に五条山の「伊之助、岩蔵、喜兵衛、七兵衛、惣兵衛」、後者に五条山証人引受人として「仙太郎、岩蔵、治兵衛、惣兵衛、七兵衛、喜兵衛」の名がみられる。

また文政六年（一八二五）十二月付の「はつけ坂」へ二軒出百姓をするについて、年々銀七匁五分を冥加銀として上納するという「奉ニ差上ニ御請書之事」という文書がある。これには五条山付近の絵図がつけられていて、当時の御

林山・五条村領・平松村領などの位置や区域を知ることができる。さらに郡山藩医高橋済庵の詩があるが、これはこのころの赤膚山をうたったものである。

松林開一径 曲々路斜通 瓢酒勲迎我 桑麻暫話翁

耦耕太平俗 陶六古寺風 更問涸人至 言從富水東

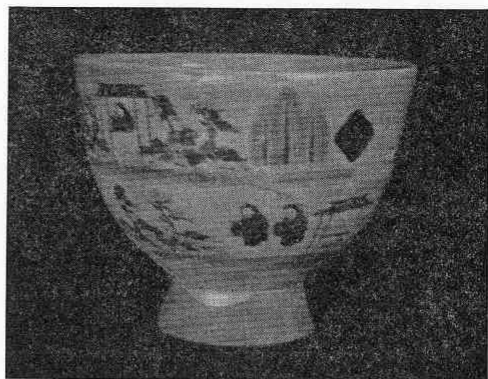
また『本朝陶器攷証』に、赤膚山の銘について記したあとに「五条山焼物師当時は三軒御坐候、乍併笹元は治兵衛に御坐候、二月二十三日条太夫 嘉永二年なり」とあることから、このころ、五条山に三軒の焼物師がいたことがわかる。これは、東の窯（山口甚治郎）、中の窯（伊之助・治兵衛）、西の窯（惣兵衛・忠治郎）を指したものと考えられる。

幕末は、概して赤膚山の衰えた時期で、陶工の多くが山城木津の鹿背山に移住した。この鹿背山移住は、文政年間（一八一八）からはじまったらしく『府県陶器沿革陶工伝統誌』によると「鹿背山村森本助左衛門は、文政十年其の祖父助左衛門宅地近傍に良土を発見し、大和五條村の陶工を雇い製陶するに始まる」と記している。こうして、鹿背山に赤膚山工人入会窯ができた。刷毛目抹茶茶碗に「赤膚山正伯初窯」の銘のあるものが出土していることから、このことが確認される。

しかし、このころに活躍したのは奥田木白であった。木白は、寛政十二年（一八〇〇）郡山藩御用小間物商、奥田武兵衛の子として生まれた。奥田家の系譜はつぎのとおりである。

奥野助次郎	奥野武兵衛	奥田武兵衛	奥田木白
法隆寺西里	和州小泉藩	郡山柳町柏屋	幼名亀松中年
田辺小路に	の家に御先	に奉公	佐兵衛後武兵
住む	手株を求む	宝暦八年、郡山	衛、明治四年
		堺町に借家	二月十三日没
			年七十二
			文政九年出生
			幼名辰次郎後
			佐兵衛、明治
			十二年六月二
			十五日没
			年五十四

奥田木白が、趣味として楽焼をはじめたのは、天保六年（一八三五）のことである。松田正柏氏所蔵の木白自筆「楽



赤膚焼木白奈良絵茶碗

保育社刊カラーブックス269『茶碗のみかたⅠ』から

焼口伝控帳」の表紙に「天保六年五月ヨリ全八酉五月改」、裏表紙に「冠山奥田武兵衛陶器異名木々斎木白」とあることや、西大寺に寄進した五個の楽焼茶碗の「寄進之記」に「当武兵衛行年三十七歳也、親共存命ニ而一覽せしむる也、当武兵衛木白と云て、天保六未年五月より楽焼初る也 施主柏屋武兵衛自作」とあることから明らかである。この五個の茶碗の中で、春用としてへら彫の玉の絵のあるものを天保七年（一八三六）に寄進しているが、これは、このころ、青木木兎が小泉藩の重臣某に贈った茶碗と比べてよく似ており、木白が木兎から焼物の指導を受けたことが推察される。

木白は、天保十年（一八三九）から、上絵を南都重兵衛周斎から習い、天保十一年秋から、五条山の中の窯の伊助に本焼を依頼するようになったが後には東の窯に頼んでいる。こうして、趣味の焼物作りからすすんで、陶器師を家業とするようになったのは、嘉永三年（一八五〇）のことである。看板に、

摸物類

瀬戸 松本莊 唐津 高取 青磁人形手 御本半使 南蛮並楽焼類

としているところに、謙虚な木白の態度があらわれている。

木白の子の木佐の「佐兵衛手記」によると、この年木白は江戸に行って四〇五軒から注文をうけて帰ったが、尾張町の橋屋の注文は全部印なしの約束で、これを木白の「印ぬけ」という。木白が赤膚萩の釉を完成したのもこの

年と考えられる。赤膚焼では従来は釉を使っていなかったが、大仏殿再興のとき長門から用材を入手した関係で寄贈された萩茶碗があり、木白はそれを研究して春日祭礼に使ったといわれる。「釉薬調合法」に、春日祭礼に使ったという白土を釉薬に用いセキと名づけている。木白は、大坂の西横堀の天満屋喜兵衛と淡路町の布屋利兵衛の二軒に作品を送っている。さらに「楽焼はわれの力もおよぶまじ、地水火風の恵みなりけり、木白造」という言葉も残している。

奥田木白は、こうして赤膚焼の名をあげ名工として幾多の作品を残し、明治四年（一八七二）二月十三日、七十二歳で没した。その子木佐^{もくさ}も器用で父にまさる技術をもっていたともいわれ、二代目木白を名乗って、父と同一の印を使ったので、その区別がつけにくい。

また木白のロクロをひいた人として、五条山の山口甚次郎の長子山口縫造の名が伝えられている。この人は、京系統の名工でロクロの名人であったといわれ、明治三十五（一九〇二）に八四歳で没した。

第三節 名所としての奈良

奈良の名所

寺社参詣の旅から遊覧の旅へ

奈良は、古代では政治の都であったが、平安遷都以後は南都といわれて寺社の都であったために、貴族や僧侶らはなやかな巡礼地の中心をなしていた。したがって、藤原氏の氏神・氏寺で